

# I. オンラインシンポジウム

2021年1月30日（土）13：00－15：00

受験学力形成を目指さない中高一貫教育は研究者養成にどう貢献するのか  
— 名大教育学部附属中・高等学校出身者による「中高大院」接続シンポジウム —

## 1. コーディネータによるシンポジウム趣旨説明

大谷 尚

本日は当センター主催のシンポジウムに参加して下さり、誠にありがとうございます。

ご承知の通り、高大接続改革は、①高校教育、②大学教育、③大学入学者選抜の3つの一体的改革です。そして、現状の大学入試が、思考力の発達のボトルネックとなっていると見て、それを改革することで、「記憶と想起に基づく受験学力の形成」に傾く高校教育を変革しようとしています。しかし、そのための3本柱であった、①大学入学共通テスト国語・数学への記述式の導入、②英語の「スピーキング」を評価する外部テストの導入、③個別入試における「主体性・多様性・協調性」の評価の導入、はすべて先送りされ、実現の見通しも立っていません。この失敗の原因として、その社会実装があまりにも乱暴だったことが指摘できます。しかし同時に、改革を主導する理論と概念が不明確だったことも考えるべきだと思っています。

その中心は「学力の三要素」です。そもそもこれは2007年の学校教育法改正のときに、その第30条に、「小学校における教育は」として規定されたものです。それが2016年の中教審答申いわゆる「高大接続答申」と、その2年後の「高大接続システム改革会議最終報告」で、「この規定は中学校、高等学校、中等教育学校にも準用されている」と無限定に拡張されました。

そもそもこの3番目の要素の「主体的に学習に取り組む態度」、今日の「主体性・多様性・協調性」は、学級担任制の小学校を想定して、その育成と評価を期待したものです。したがって中学や高校のような教科担任制なら、これを指導し評価する別の枠組みが必要です。ですからこの拡張には無理があります。

またそもそも要素というのは、それに分解でき、かつ1つを変化させても他は変化しないものです。要素と言われるものでこの原則からはずれるものはまずありません。しかし「学力の三要素」は相互に影響しあい、3つに分けられません。つまりこれは3要素ではなく、「学力の3側面」なのです。

このように、高大接続改革は、その核となる理論的・概念的枠組みの希薄さと、その後の、あるいはそれゆえの社会実装の乱暴さによって、いわば頓挫した形になっているのだと考えられます。

そこで、これらを踏まえ、いったん視野を広げて、高大接続の核となる「高大接続型学力」というものを、幅広くかつオリジナルな視点で捉え直し、その育成環境、育成過程、その機能や課題を見出すことが必要だと考えます。

本シンポジウムでは、そのような学力が育まれた例として、中高時代からの学力や知的関心を発展させて研究者になった人たちに着目します。そして「高大」を上下に広げた「中高大院」接

続という観点から、中学から大学院卒業までの15年以上のスパンで、パネリストがご自身を振り返り、それを互いに示し合うことで、これまで共有されていなかった知見を得ることを目指します。

そのパネリストとして、名古屋大学教育学部附属中・高等学校の卒業生を選んだのは、この学校が伝統的に、受験学力形成を目指していないからです。

もちろん本校には総合人間科、SSH、SGHなどのカリキュラムがありますし、協同的探究学習という授業方法があります。しかし今回のパネリストのうち2名の先生方はそれ以前の卒業生です。では何が本校の学力形成の特長なのでしょうか。

そのうちの1つは、そして非常に大きいのは、学校文化であると思います。ほんのひとつだけ例を挙げると、この学校には、遠足や修学旅行のときのお小遣いはいくらまでという決まりがありません。もしそれを決めたら、いくら持っていくのが良いのかを、「①自分で考える機会」「②友達と考える機会」「③保護者と考える機会」（これを「主体的に考える機会の三要素」と呼ぶべきかもしれませんが）を学校が奪うことになります。思考力を育むのなら考える機会を奪ってはなりません。本校はこのように、自分で考えさせる文化を持つ学校なのです。

さて、今回のパネリストのベテランのお二人は、ロシア語だけでなくロシアの食文化まで研究なさっている沼野先生と、研究対象に対する愛情と研究する喜びが全身から溢れ出てくるような千田先生で、どちらもテレビでもご活躍の高名な先生です。

若手の中山先生は南極を3回訪問し、地球温暖化などの問題と向き合っているらしいですし、菊田先生はアフリカを十数回訪問なさり、現地のイネの栽培の研究を通して食糧危機や飢餓問題の解決に貢献しているらしいです。お二人とも地球規模の問題を扱う国際的な研究者です。

今回のパネリストには、学術的で客観的なお話ではなく、むしろ主体的で主観的なナラティブを語って頂きます。その点で、慣れないこととは思いますが、だからこそ有意義なお話が聴けるのではないかと考えています。また、パネリストには「本校での経験が、研究者としての仕事にいかにつながっているか」というような、シンポジウムの趣旨に沿ったお話をして下さらなくてもよいとお伝えしています。そのために、このシンポジウムが集束的でなく発散的なものになっても、それはかえって意義あることだと考えています。ただし、各パネリストのお話の共通性と差異性が分かりやすくなるように、パネリストには共通の8つの質問をお伝えしてあり、それに答えて頂きながらお話し頂くことになっています。

なお、「中高大院接続」としてはありますが、沼野先生は学部ご卒業後に社会人経験を経て大学院に進学なさいましたし、千田先生は大学ご卒業直後から学芸員として研究生活を開始され、大阪大学で論文博士で博士学位取得をなさいました。また、菊田先生と根本先生は高校からの入学者で、それゆえ、外から来た生徒としてこの学校に感じたことなども話して頂けると期待しております。

その点も含めて、お話を伺うのを楽しみにしております。

## コーディネーターからの8つの質問


1. 現在の専門と研究内容
2. 進学校でない本校に入学した理由と入学後に感じたこと

3. 高校受験が無いことのメリットとデメリット
4. 大学に入ってから本校卒業生が他校卒業生と違うと感じたこと
5. 研究職を志望したことへの本校での学習経験・生活経験の影響
6. 研究テーマや研究能力への本校での学習経験・生活経験の貢献
7. 本校固有の教育的風土や学校文化は何か
8. その他言いたいこと

## 2. パネリスト講演

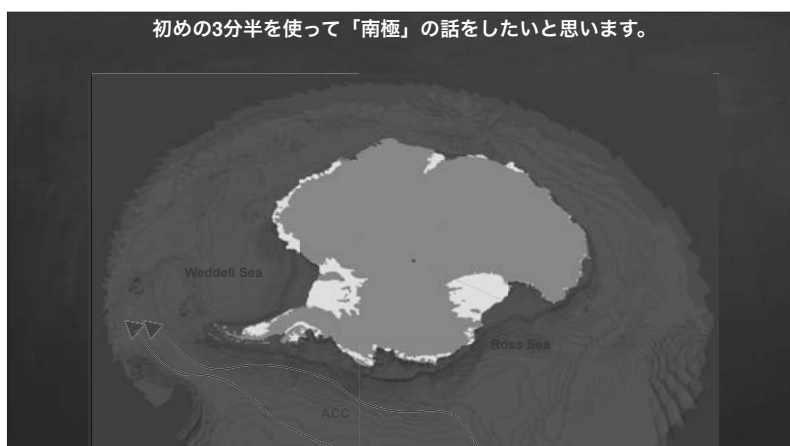
### パネリスト講演（1）

中山 佳洋 氏

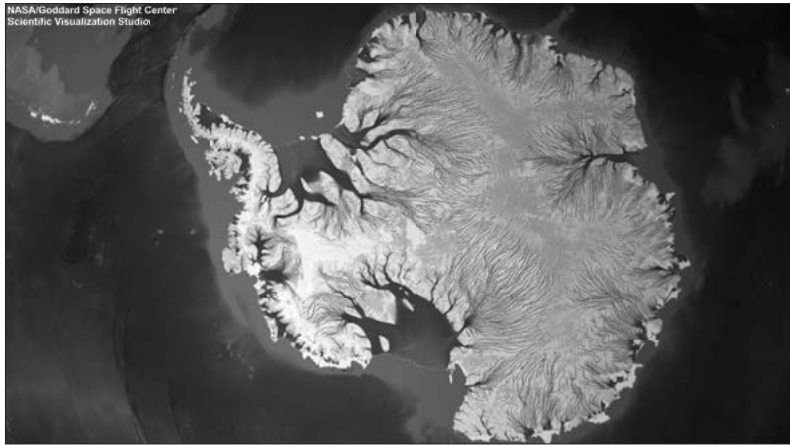
オンラインシンポジウム  
受験学力形成を目指さない中高一貫教育は  
研究者養成にどう貢献するのか  
-名大教育学部附属中・高等学校出身者による  
「中高大院」接続シンポジウム-  
2021.1.30 13:00-15:00  
  
北海道大学・助教  
中山 佳洋

### 「南極」の話

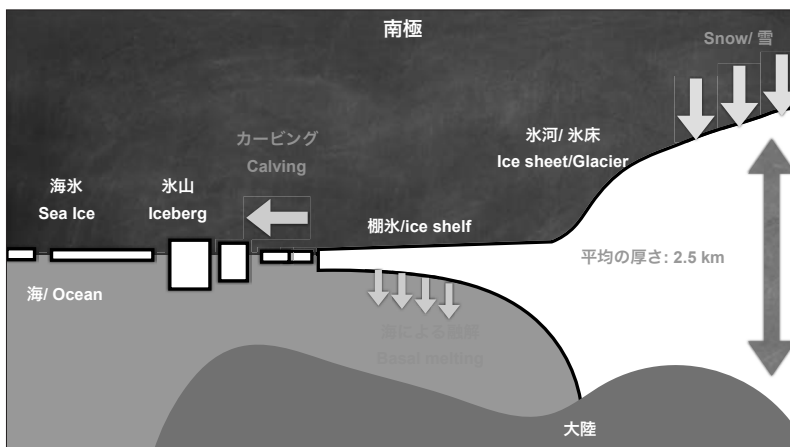
私は南極の海と氷の専門家です。その話を少ししたほうが、きっと先の話をわかってもらえると思うので、初めの3分半を使って南極の話をしたいと思います。その後、本題に入っていきます。皆さんご存知かと思いますが、南極というのは南半球の大陸なんですね。



こういった形をしているんですけども、この上にたくさん雪が降って、それが広がっていくみたいなイメージです。日常だと、トーストがありますよね。パンのトーストの上に蜂蜜をダラーッとかけますとダラーッと蜂蜜が広がっていく、そんな感じにイメージをしていただくといいと思います。そんなふうに雪が広がって、氷が流れているんですね。

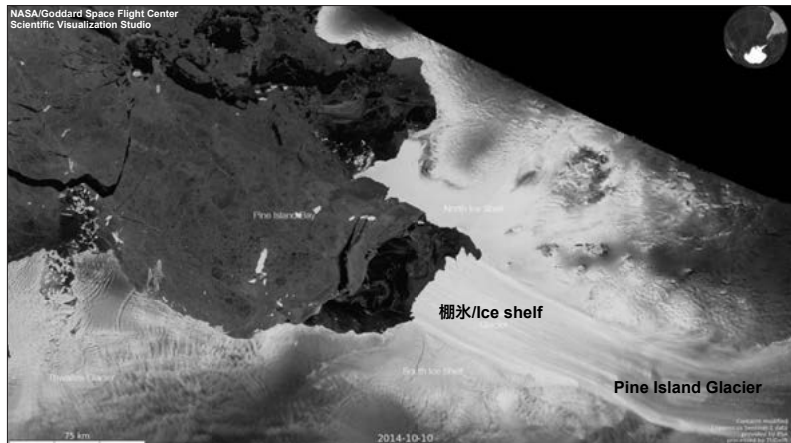


それを宇宙から見ると、今は人工衛星を使うと、どういうふうになっているのかよく見ることができます。スライドを見ていただくと、この辺りに雪が降って、それが広がっていく様子がアニメーション(紀要では写真に変更)で見られるんですが、そういうふうに雪が降って、固まって、それが広がっていくという。それが流れていって、ある所では海にまで入っていくんですね。そういったものが「南極」ということになっているわけです。



南極大陸から海に入り込んでいく、この辺りの所でバシッと切って横から見ると、実は断面はこんなふうになっています。こういう所、内陸部で降った雪が降り積もって、それが徐々に流れていき、ある所で海に入るんですね。

氷は水より軽いので、そういう所では浮くわけです。このように氷河が流れ込んで浮いているものを「棚氷」といいます。この棚氷というのは、一部は海に溶け、一部はカービングといって、氷山を作るといった形で、海に入っていきます。私の専門はこの棚氷というものになっています。



もう少しだけ、この棚氷を見てみたいと思います。棚氷ってどんなふうになっているのかということ、これは宇宙から人工衛星が撮ったアニメーション(紀要では写真に変更)で、左側が海、右側が大陸です。ここで棚氷の先端に注目していただきたいんですが、見ていくとこうやって徐々に徐々に前に進んでいるというのがわかると思います。これが実際に、氷河が流れていますねということなんです。そして今、ポキッと折れましたが、これが、氷山ができたところです。タイタニックを沈めた氷山です。

ここで特にお見せしたいのは、この流れている部分です。右から流れてきていますけれども、上流側が氷河で、下側、図の左側が棚氷なんですね。この棚氷、こうやってできるのを見てみると、ガシッと湾の中にできているんです。つまりどういうことかということ、スライド4の図ではよくわかりませんでしたが、上流にはすごくたくさんの氷があります。この棚氷というのは、これらをガシッと止めている蓋、栓みたいな働きをしているわけです。これが実は重要で、もし棚氷がなくなったり薄くなったりしてしまったら、後ろにあった氷が一気に海に流れ込んでしまう。そして今後100年間で、1mぐらい海面が上がるかもしれないというふうに言われているということで、棚氷が海とどう関わっていて、そしてそれがどう変わってしまうのか、またそうした変化によって、将来的にすごくたくさんの氷が海に流れ込んで、海面上昇に寄与してしまうかもしれないというのが、私の今取り組んでいるテーマになります。

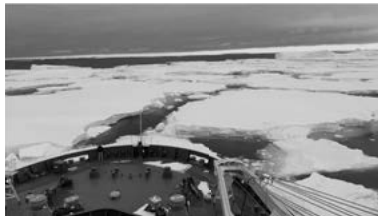
ということで、さらっと私が何をやっているかという話を先にしたんですが、私がこういう研究に取り組むに至るまでを、どんなふう生きてきたのか。名大附属の、今回の趣旨である「受験学力の形成を目指さない中高一貫教育」が、私にとって研究者養成、研究者になるために、どういうふう貢献してきたのかという話をしたいと思います。

## 自分を評価する「ものさし」と学校教育

名大附では総合人間科という授業がありまして、中1と高3では生き方を探るといようなことがテーマにあったんですけど、今日は逆に自分の生き方を振り返りながら、どんなふうそれが貢献してきたかという話をしたいと思います。

## 1. 現在の専門と研究内容（経歴）

	北海道大学低温科学研究所	2019-2020：南極地域観測隊 (JARE61)
<b>2019</b>	NASA Jet Propulsion Laboratory	2019：白鳳丸
<b>2015</b>	博士：University of Bremen/ Alfred Wegener Institute for Polar and Marine Research (AWI), Germany	2013：初南極
<b>2011</b>	修士：北海道大学環境科学院	JARE61：しらせよりトッテン瀬永沖
<b>2009</b>	学士：名古屋大学工学部機械航空工学科	
<b>2005</b>	交換留学：University of Michigan	
<b>1999</b>	名古屋大学教育学部附属中学高等学校	



私の経歴なんですが、1999年に名大附に入っています。その後、名古屋大の工学部航空工学科に入りまして、1年、交換留学でアメリカに行きました。その後分野を変えて、北大の修士で地球環境、南極関係の研究を始めて、その分野で継続してドイツに行き、NASAジェット推進研究所という所に3年程度、アメリカのフェローシップをとって行って、その後、今の低温科学研究所という所に所属しています。南極には3回行ってきます。ちょっとだけ映像を持ってきたんですが、これは私が去年、ちょうど今頃ですかね、船に乗っているときの、「しらせ」が進んでいるときの映像です。

## 2. 附属とは私にとってはどういうところだったのか？ 進学校でない本校に入学した理由、入学後に感じたこと



- 理由：両親のススメ  
学区の中学に問題を感じた両親が説明会で教育方針が気に入った。「自由な校風」
- 入学後に感じたこと  
「個性と個性のぶつかり合い」
- 研究者になる意識：  
全くなかった。自身は何を自分の個性にしたいのか？と考えるようになった。

ということで、ここから過去を振り返りながら進めていきましょう。附属とは私にとってどういう所だったのか。進学校ではない本校に入学した理由は、基本的には両親の勧めだと思います。面接ではちゃんと、自由な校風が、とかいろんなことを言ったのを覚えています。一番大きかったところは、両親が「行ったらいいんじゃない？」と言ったところと、自由な校風、おもしろそうだなと思ったところだと、なんとなく覚えています。


ここに、昔の写真を探して持ってきたんですが、私、今はかなり体も大きくなりまして、がっしりしているんですけども、実はここにいた私は、2段目の右から2人目なんです。非常に体も小さくて。入学後に感じたのは、やっぱり附属という所には、すごく個性的な人たちが集まるということでした。私も個性的なほうだったとは思いますが、その中でも特に飛び抜け

て個性的だったわけではないので、むしろたぶん、埋もれていたほうだと思っています。入学後に感じたのは、普通の学校だと体力、学力とかでみんな測られるようですけれども、ここでは個性だということでした。どれだけ個性があるかということも、ちゃんとそれを考えなさいというのが、一つ大事なことなんだというのをすごく感じました。だから、いろいろたのしいこともあれば苦しいこともあった中学・高校時代だったと思っています。

この当時は研究者になるという意識は全くありませんでした。自分が自分の個性をどういうふうにしたのかということを、すごく考えるようになった時代だったと感じています。

そうやって高校時代を過ごしたんですが、高校時代を通じて自分は何をやりたいのかというのがまだ明確ではなかったけれども、航空とか、流体とか、宇宙とか、飛行機とかに興味があったので、名大に行こうかなということで、名大の航空に入りました。

**3. 高校受験が無いことのメリットとデメリット**  
～何をやりたいのかまだ明確ではなかったが興味があった名大航空へ～



- ☺
  - 英語、物理、数学など、好きなことを伸ばすことができた  
→アメリカ留学。
  - 自身を評価する「ものさし」を持つことができた。
- ☹

ただ、名大に（附属学校を含めて）10年も行くのもなというのもちょっとあって、入学した後すぐに留学センターに行きまして、留学をしようかなというような話をしたんです。だから、そのときに十分それが可能な英語力があったというのは、すごく大きかったところでした。これは当たり前ですけれども、高校受験がないということによって、自分の好きな英語、物理、数学とかを伸ばすことができたというのが、本当に自分自身にとってアメリカ留学につながりました。

**3. 高校受験が無いことのメリットとデメリット**  
～何をやりたいのかまだ明確ではなかったが興味があった名大航空へ～



- ☺
  - 英語、物理、数学など、好きなことを伸ばすことができた  
→アメリカ留学。
  - 自身を評価する「ものさし」を持つことができた。
- ☹

他にもう一つメリットがあると思っています、それは、自身を評価するものさしを持つことがで



きたということです。これは詳しく後で話します。デメリットもあると思っているんですが、これも後から触れていきたいと思います。

このように名大に行きまして、その後、アメリカに行くんですけども、交換留学でミシガン大というアメリカの航空関係でトップ5ぐらいの大学に行くことができたので、そのトップの環境を見ることができたというのは、私の人生にとってすごく大きな転機になったと感じています。ここまでが、名大附入学から名大卒業までの話です。大学卒業後に分野を変えて、北海道大学という所に移りました。

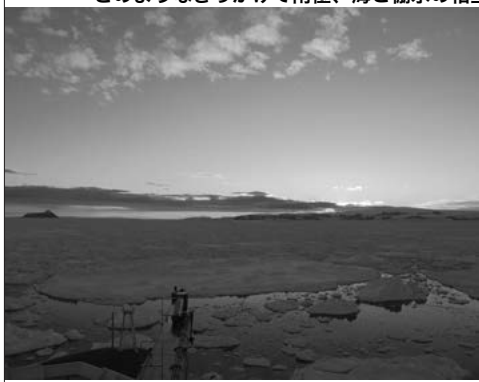
<b>5. 本校での学習経験・生活経験が研究職を志望する上でどう役立ったか？</b> <b>～どのようなきっかけで南極、海と棚氷の相互作用の勉強を始めたのか～</b>	
	<b>「ものさし」：「個性的」な（自分にしかない）形で、周りの人を幸せにできること。</b>
	宇宙航空分野をやめる理由 ・ 航空関連のトップレベルの環境で研究することは、軍事産業と強く関わることになる。
	南極の海と棚氷を選んだ理由 ・ 地球、流れ、海に関係する研究をしたい。 ・ 得意分野を活かしたい。 ・ 世界でもっとも未知な領域で、かつ、地球気候変動、海面上昇などを通して、人間社会に大きく影響しうる。
	↓ ・ 研究分野の歴史は長いですが、重要性が認識されるようになったのは、この10年ほどである。 ・ 当時は、日本に専門家はおらず、ドイツに留学。

ここで、名大附の学習経験・生活経験が、研究職を志望する上でどう役立ったかという話にいきます。これは私の解釈では、どのようなきっかけで南極、海と棚氷の相互作用の勉強を始めたかということになります。まず、宇宙航空をやめた理由というのは、アメリカに行ったおかげでわかったんですけども、宇宙航空関連分野というのはやっぱり、トップレベルになればなるほど軍事と関わるんです。ということで、自分がそういうことをやっていく将来は、あまり想像できませんでした。

同時に、さっき出てきたものさしの話、たぶんこのことをずっと、中高大と考え続けていました。私が自分をどう評価するかということですね。私にとってのものさしは、個性的な、つまり自分にしかない形で周りの人を幸せにできるということです。そういった「個性」を、自分だけのものをつくっていききたいというふうに感じているのだと思います。

こういったことを考えられるようになったのが、たぶん、中高大学時代。南極の海と棚氷を選んだことにはもちろん理由がありました。たとえば興味のある研究をしたい、得意分野を生かしたい、そして世界で最も未知で、かつ地球気候問題、海面上昇といった人間社会に大きく影響し得る問題に関わっているという理由で、南極をテーマにしようということになりました。

**5. 本校での学習経験・生活経験が研究職を志望する上でどう役立ったか？  
～どのようなきっかけで南極、海と棚氷の相互作用の勉強を始めたのか～**



「ものさし」：「個性的」な（自分にしかできない）形で、周りの人を幸せにできること。

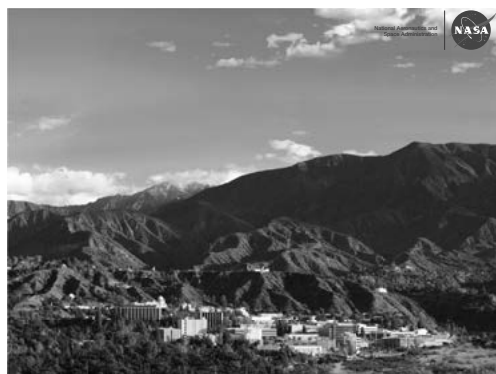
宇宙航空分野をやめる理由  
 ・ 航空関連のトップレベルの環境で研究することは、軍事産業と強く関わることになる。

南極の海と棚氷を選んだ理由

- ・ 地球、流れ、海に関係する研究をしたい。
  - ・ 得意分野を活かしたい。
  - ・ 世界でもっとも未知な領域で、かつ、地球気候変動、海面上昇などを通して、人間社会に大きく影響しうる。
- ↓
- ・ 研究分野の歴史は長いが、重要性が認識されるようになったのは、この10年ほどである。
  - ・ 当時は、日本に専門家はおらず、ドイツに留学。

ただ、この研究分野、歴史は実は長いのですが、重要性が認識されるようになったのはこの10年ぐらいですね。当時は日本人の専門家は全くおらず、きっと私がこの分野の博士を取った初の日本人だと思います。ということで、ドイツのプレーマーハーフェンという街に行き、この分野の研究をして、南極にも初めてこのときに行きました。

**4. 大学に入ってから本校卒業生が他校卒業生と違うと感じたこと**



もちろん、総合人間科、グループワーク、など学んだことはたくさんあったが。。。

自身で自身を評価する  
 「ものさし」を定めること。

ドイツで博士を取った後は、アメリカのNASAジェット推進研究所に行くんですけども、こうした私の経験を踏まえて、名大附の卒業生と他校の卒業生を比べてみると、先ほどいろいろ書いたように、もちろん総合人間科とか、いろんな細かい、良かったこと・違うことはいっぱいあるんですが、大きな違いというのは、自分自身で自己評価をできるなということ。これが大きかったなというふうに思っています。

研究テーマとか研究能力を決める上で、どういうふうに名大附での経験が役立ったかといえば、自分なりのものさしを持つことができたということで、それが研究分野を選択し、それを開拓していくということにつながったと考えています。

#### 6.研究テーマや研究能力への本校での学習経験・生活経験の貢献

- 「個性的」、「自分にしかできない形で」を重視する「ものさし」



先駆的な研究分野を選択し、分野を開拓していくこと。

名大附固有の教育的風土・学校文化といえば、「自由な校風」、ある意味「個性と個性のぶつかり合い」でしょう。その中で、自分が自分をどう評価するかということを決めていくことだというふうに感じています。

#### 7.本校固有の教育的風土や学校文化は何か

- 「自由な校風」  
(または、「個性と個性のぶつかり合い」)
- 「ものさし」を自分で決めていくこと。

#### 世界で一番の環境を見てみるということ

##### (まとめ) 受験学力形成を目指さない中高一貫教育は 研究者養成にどう貢献するのか？

###### 貢献する

- 英語、物理、数学など、好きなことを伸ばすことができた。-> アメリカ留学につながった。
- 自身のことを評価するための「ものさし」を設定することができるようになった。(他校であれば、「ものさし」は与えられるものであっただろう)。  
-> 先駆的な研究分野を選択し、分野を開拓していくことができています。

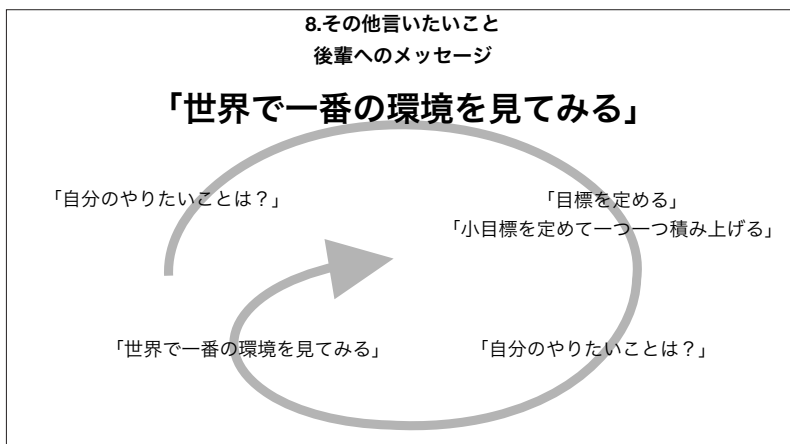
###### 附属では学びにくい研究者に必須なこと

- 自由な校風、「ものさし」を押し付けないということは、同時に、他人と比較しないということでもある。強制されること、周りから期待されて学ぶ、ライバルができるという機会の損失。

受験学力形成を目指さない中高一貫教育というのは、私にとっては、まず得意分野を伸ばすものでした。それによって将来のチャンスが広がるという意味で、すごく貢献したと思います。同時に、自身のことをどう評価するかというのを自分で設定するわけです。他校であれば、自分をどう評価するかというものさしは、きっと与えられるものだったと思います。そういう意味で、それが自分にとっては先駆的な研究分野を選択して、それを開拓するというふうに、今、すごくつながっているといえます。

ここまではいい話をしてきたんですが、同時にものさしを押し付けないということは、私にとってはですけども、他人と比較をしないということです。強制されて学ぶことがないということですね。ものさしを押し付けないということは、自分で自分をどう評価するか決めないといけません。そういった意味で機会の損失にもつながるなというふうに思っています。

ということで、私なりに、これに対してどう向き合うかという話を最後にちょっとだけするんですが、今、附属の後輩も話を聞いているということで、後輩へのメッセージという形で、最後にまとめます。




私が意識していることは、「世界で一番の環境を見てみる」ということです。これはどういうことか、どんなふうにするかという、たとえばアメリカの留学もそうなんですけれども、自分のやりたいことは何だろうと考えたときに、その環境でトップクラスの所をまず見てみる。そうすると、たとえば僕の場合、アメリカに行ったら、これがアメリカのトップクラスなのかとわかるわけですね。それをやりたいかやりたくないかがわかるんです。それがやりたいのであれば、それに対して小さな目標を定めて、それをどんどん実現していく。その中で、また立ち返って同じことを繰り返していくのです。私は今も先のことを、研究分野も次の次のステップのことを考えていますので、参考にしていただけたらいいなと思って、後輩へのメッセージで最後締めさせていただきます。

オンラインシンポジウム

受験学力形成を目指さない中高一貫教育は  
研究者養成にどう貢献するのか  
-名大教育学部附属中・高等学校出身者による  
「中高大院」接続シンポジウム-

2021. 1. 30 13:00-15:00



東京外国語大学・教授  
沼野恭子



そうですね、南極とのつながりからいきましょうか。しばらく前に南極がマイブームだったんです。実は南極ビエンナーレというロシア人アーティストの企画したプロジェクトがありまして、そのときに、南極というものにもものすごく憧れて、素晴らしい、一種の、誰の領土でもないユートピアのような土地ということから、私が今所属している大学の総合文化研究所を「南極」にしようという、とてつもないことを提案したりしました。さて、南極ほどではないんですけども、同じくらい寒いロシアの話が続きます。ご容赦くださいませ。

### 私の書いた本、訳した本

1. 専門と  
研究内容

ロシア文学文化・比較文学

- ・現代ロシアの女性文学
- ・20世紀初頭のロシア文学・文化
- ・近現代の日露文化関係



私の専門と研究内容は、ご紹介にあったとおり、ロシア文学・ロシア文化、比較文学・比較文化でして、研究対象としているのは主に現代ロシアの女性文学で、翻訳アンソロジーを作ったりもしております。ご覧いただいていますのは、論文集といえますか、エッセイ集といえますか、その中間のような著書です。気が多いものですから、いろんなところに手を出してしまうという癖があり、文学だけではなくて、美術、音楽、映画などのさまざまな文化に関心が向きます。ロ

シア、それからロシア周辺の旧ソ連という言い方をしてもいいかと思うんですけども、さまざまな文化・文学がおもしろいと思っては、そこをちょっとかじって、紹介したり研究したりということをしております。ロシア・アヴァンギャルドですとか、ソ連時代の吟遊詩人の話ですとか、ロシアファッションも最近はすごくおもしろくて、何をやってもたのしい、そういう能天気な人間です。

右側の『ロシア万華鏡』というのが、昨年出した新しい本です。この中ではロシア文学、旧ソ連の文化だけではなくて、日露関係についても触れています。特に20世紀初頭の日露関係といいますと、日露戦争があったのでお互い敵国同士だったわけですが、ちょうどその頃から日露両国は互いが互いに注目し合うんです。それで、ロシアでは、一種のジャポニズムのような現象が見られます。もちろん、フランスのジャポニズムから遅れること約30年になりますが、浮世絵を集める人とかが出てくる。そういった文化現象についても紹介しています。



## 1. 専門と 研究内容

それから、大谷先生もご紹介くださったとおり食文化についても大いに興味があります。もともと食べるのが大好きだったのですが、ロシアの食について本を書く機会がありまして、それ以後、食にもすごく注目しています。そして、文学と食という、好きなものを2つドッキングさせてみようと思ったのが『ロシア文学の食卓』という本に結実しました。つまり、ロシアの文学作品の中でどんなふうに食べ物が描かれているを探ったものです。要するに食表象なんですけれども、これをやり始めたら、またおもしろくてしょうがないんです。実は食というものが、文学作品の中中でいろいろな機能を果たしているということ、予想をはるかに超えて大きな意味を持っているということがわかりました。

これは12～13年前に書いた本なんですけれども、こんなに風変わりなテーマで、埋もれてしまいそうになっていた地味な本を、筑摩書房の編集者さんが見出してくれまして、新しい装丁でちくま文庫に入れてくださるということになりました。というわけで、ロシア文学、比較文学の他に食文化にも興味を持っています。




それから、研究ともう一つ、両輪みたいな形で携わっているのが翻訳です。ここには、いくつか私が訳した本の表紙を見ていただいています。どれもこれも思い出がいっぱいつまった翻訳、本ばかりなんですけれども、一番最近出したものは右下の、ちょっと大判の絵本です。私の所属している東京外国語大学は出版会を持っていて、そこからこの『ちいさなタグボートのバラード』という絵本を出していただきました。たぶん大学の出版社が絵本を出すということは珍しいのではないかと思います。これは、ノーベル文学賞を取ったロシアの亡命詩人ブロッキーと、国際アンデルセン賞を受賞したイラストレーター、オレイニコフという夢のような組み合わせが生み出したすごくて素敵な絵本です。

## 名大附属ロシア語クラブ

### 2. 進学校でない本校に入学した理由と入学後に感じたこと

- ・高校校受験がないため
- ・大学の附属校が好きだったため
- ・家から学校まで案外近い！
- ・個性的な先生が多い！



ここからは、名大附属との関係についてお話ししたいと思います。実は私は、後ほどコメントタとしてお話しくださる根本さんと同級生です。根本さんは高校から入られましたけれども、私は中学から6年間、名大附属に通いました。どうして名大附属の中学を選んだのかということですが、高校受験がないということが大きかったと思います。それから、中山さんと同じで、母が「いい学校よ」と勧めたので、たぶんここにしたんだと思います。母が、大学の附属校が大好きだったんですね。小学生のときは東京に住んでいたのですが、小学校はお茶の水大学の附属でした。とこ

ろが、小学校3年生のときに父が名古屋に転勤になり、そこからは普通の公立の小学校に行っていたものですから、また国立の附属学校に入れたいという、たぶん母の希望だったと思います。

入学後感じたのは、すごく単純な話なんですけれども、家から学校までが近いということでした（笑）。歩いて通えましたが、それだと友達に会えないので、わざわざ地下鉄にひと駅かふた駅乗ったりして、友達と一緒に通っていました。そして、ここが一番大きいのですけれども、私にとってやはり名大附属というところは、非常に個性的な先生が多いということです。

### 3. 高校受験が無いことの メリットとデメリット

#### 【プラスに働いた面】

- ・のびのびと好きなことができる
- ・友だちとずっと一緒にいられる



#### 【マイナスに働いた面】

- ・思いつきません

高校受験がないことのメリットとデメリットということですが、メリットばかりしか思いつかないんですが、本当にのびのびと好きなことができたと思います。それから、中高一貫ですから、6年間同じ仲良しの友達と一緒にいられるということもメリットでした。デメリットは思いつかなくて、いい学校だったと思っています。

### 4. 大学に入ってから本校卒業生が 他校卒業生と違うと感じたこと



大学に入ってから、名大附の卒業生が他校の卒業生と違うと感じたのはどういうところかというご質問もあったのですが、ここは、私はほとんど何かを感じたということがなかったので、飛ばさせていただきます。



## 5. 「研究職を志望したこと」への 本校での学習経験・生活経験の影響

・高校のとき授業に組み込まれた「クラブ」の時間にロシア語学習をしたことが直接、東京外国語大学ロシア語学科を選んだ動機になった。そのとき NHKラジオ「ロシア語講座」のテキストを使って教えてくださったのが Y先生。

・今にして思えば、名大附属のユニークな先生方がそれぞれご自分の好きなことを楽しそうに生徒たちに話して下さっていた姿にも感化されたかもしれない。



次に、研究職を志望したことへの影響ですね。これはものすごく大きくて、私の一生を左右したと言ってもいいくらいです。と言いますのは、高校のとき（私の場合はるか昔ですけれども）、月曜日の6時間目だったというのを今でも覚えているんですが、クラブの時間というのを時間割の中に組み込む制度ができたんです。

それで先生方が、ご自分がこういうのだったらクラブ活動をしてもいいというのを担当して下さったんです。それで、現代国語の先生が、ロシア語クラブというのを開いて下さったんですね。まあ、英語は勉強しているので、何か他の外国語をやってみたいという軽い気持ちもあり、一方でロシア文学が好きだったということももちろんあって、ロシア語クラブに入りました。友達何人かと一緒に勉強しましたが、友達でその後もしつこくロシア語を続けたという人はなくて、結局、私ひとりがロシア語の道を進むことになりました。

そのときに、その先生は、NHKラジオの「ロシア語講座」のテキストを使って、アルファベットから（いわゆるキリル文字ですね）、それをアー、ベー、ヴェーというふうに教えて下さいました。その先生はご自身、独学でロシア語を学んだそうです。それで後に、先ほどご紹介くださいましたように、私はNHKのラジオやテレビの番組でロシア語講師をしたんですが、先生にご報告しましたら、とっても喜んで下さって、「あのロシア語クラブから、ロシア語をずっと勉強してくれる人が育った」みたいに言って下さいました。本当にいろいろな、ユニークな先生方がいらっしゃいまして、ご自分の好きなことを本当にたのしそうに話して下さるんですね。その姿に感化されたということはあると思います。

## 6. 「研究テーマ」や「研究能力」への 本校での学習経験・生活経験の貢献

・現代国語のY先生が夢みるように宮沢賢治の『オッペルと象』について語っていらしたことを今でもよく覚えている。それは、生徒に知識を植えつけるという姿勢ではまったくなかった。文学というものがこれほど人を魅了するものなのかと驚嘆した。

・化学のT先生はいつも生徒に「考えさせる」ことを最優先していた。生徒たちがわかるうがわかるまいがお構いなく大学レベルの語彙を用いて「考えること」の大切さを説いていらした（ように思う）。

・数学S先生は、生徒たちがわかるうがわかるまいがお構いなく相対性理論を説明していた！



たとえば、先ほどのロシア語クラブを担当して下さった先生は現代国語の授業中に夢見るように『オッペルと象』についてお話しく下さいましたね。まったく受験勉強じゃないわけです。でも生徒としては、その先生が本当に『オッペルと象』が好きなんだというのは、ピンピンわかるわけです。小説というものは、これほど人を感動させるのか、魅了するのかというのを感じたんだろうと思います。今でもよく覚えているんです、その授業の光景を。

それからまた、化学の先生で、「考える」ということがいかに大事かということ、授業中いつも生徒たちに繰り返しおっしゃっていた先生がいらっしゃいました。いつも白衣を身に着け、大学レベルの語彙を黒板に書かれて「君たち、こういうのが大事なんだよ」と説かれました。大学の授業を聞いているような感じになって、ちょっと自分が背伸びしたような、と同時に、その先生に自分の薄っぺらさを見透かされているようにも思い、ちょっと怖いというふうにも思っていたんですけども、でも、その先生のことは今でも本当に尊敬しています。

もうおひとり、数学の先生の授業も風変り、生徒がわかるうがわかるまいがお構いなく、相対性理論を講じていらっしゃいました。何時間も。こんなふうに、どの先生も本当にご自分の好きなことをなさっていて、私たちはその背中を見て育ったというとおかしいですけども、生きる方向性みたいなものを学んだのではないかと思います。ひと言でいうなら、主体的にもの考えることの大事さというのを学んだと思います。

## 8. その他言いたいこと

・小学校・中学校・高校のときから、主体的にもの考えさせる教育が行われるべき。

・人と異なる意見を持つことにポジティブな価値を与える社会に。

・「知への憧れ」を醸成するべき。

・管理する教育ではなく、自由な想像力を育む教育へ。



今、大学で学生たちに教える立場になってみますと、うちの大学だけかどうかよくわかりませんが、とても素直な優等生が多いんですね。「こうしたら？」と言うと、そのとおりアドバイスに従ってくれる。逆に言うと、批判的な意見を持つということに慣れていないように思えるんです。ただ人を批判すればいいということではもちろんありませんけれども、やはり自分の意見を持つ、人と異なる意見を持つ、それに対してポジティブな価値を与えるような社会の雰囲気によって日本全体がなっていくといいのではないかと思います。


それから、今は「反知性主義」などといわれますけれども、知というものがポジティブな価値を持っていて、知があるというのは素敵なことなんだということを、やはり社会の空気として醸成すべきではないかというふうに思います。全体としていけば、管理する教育ではなくて、自由な想像力を育む教育こそ大事なのではないかと思います。知への憧れというとき念頭にあるのは「知識」ではなく、「知恵」あるいは自分でものを考える力という意味で使っております。



最後に、本校固有の学校文化とは何かですが、先ほど大谷先生がすでにご自分で答えを言われてらしたと思いますが（笑）、私は名古屋大学の附属中学・高校のいいところは、やはり自由な校風だと思っています。冒頭でも、昨年出版した本を紹介させていただきましたが、左はその表紙です。ここの真ん中に使っている絵に、Свобода есть (スヴァボーダ・イエスチ) といくつか書いてあります。ロシアの現代アートのエリック・ブラートフの作品です。これ、ちょっと訳しにくいんですが、「スヴァボーダ」というのは「自由」という意味で、Свобода есть свобода ととれば「自由は自由」という、何かトートロジーのようなふうにも取れますし、Свобода есть и свобода ととれば「自由がある」という意味になります。タイトルからして言葉遊びのようなところがあるんですね、こうした「自由」というものを題材にした作品にやはりすごく惹かれます。この本を作ったとき自由でのびやかな表紙にしたいと思い、この作品を選んだのですが、これも名大附属の影響だったのかもしれない。

**オンラインシンポジウム**  
**受験学力形成を目指さない中高一貫教育は  
研究者養成にどう貢献するのか**  
**一名大教育学部附属中・高等学校出身者による  
「中高大院」接続シンポジウムー**

**2021.1.30 13:00-15:00**

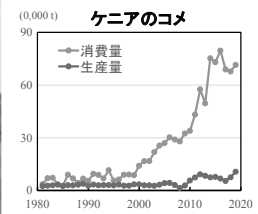



名古屋大学・アジア共創教育研究機構  
特任助教 菊田 真由実

アフリカでお米？

1. 現在の専門と研究内容

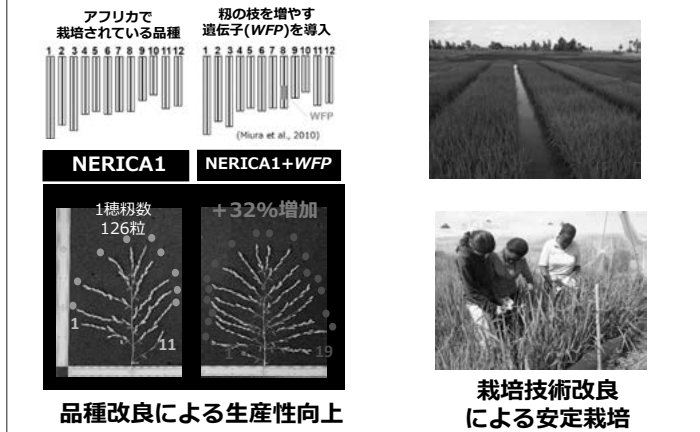
**専門: 熱帯作物学, 生産性向上, 安定栽培**  
**ケニア(アフリカ)で稲作に関する研究**



近年のコメの国内自給率: 20%以下

私は熱帯作物学を専門としております。具体的には、アフリカ、ケニアを中心に、稲作、お米の生産に関する研究を、現在を行っています。「アフリカでお米？」と思われる方も多いかと思うのですが、近年、アフリカでは人口の増加や経済成長に伴って、穀物の需要が高まっています。中でもケニアでは、ご覧のように、米の消費量は著しく増加しており、ここ20年のケニア国内の自給率は20%以下と、非常に低いのが現状です。

## 1. 現在の専門と研究内容



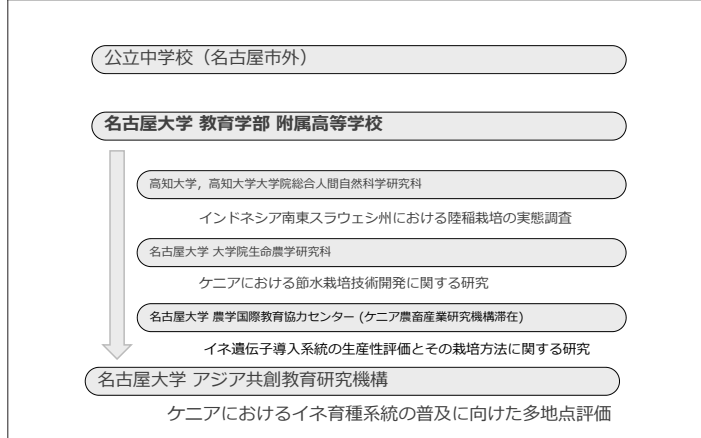
このような背景から、ケニア国内の米の生産量増加に向けて、品種改良による生産性の向上や、栽培技術改良による安定栽培に向けた研究に、現地の研究者らと共に現在取り組んでいるところです。

## 1. 現在の専門と研究内容



栽培試験の他にも、現地の農家の所へ行って聴き取り調査なども行っています。そして、聴き取り調査や、先ほどお見せした栽培試験から得た情報をまとめて、現地の研究機関や農家に向けたマニュアル整備といった活動も行っています。以上が私のざっくりとした研究内容です。

## 1. 中学～現在



この後、大谷先生から事前に頂戴した質問について回答させていただきます。私の場合は、中学校は公立中学校に通っていました。名古屋市外の公立中学校です。高校から、名大附に入学しました。大学入学後は、企業等には就職せず大学院まで進み、そのまま大学で研究を続けています。高校入学者からの視点で、今回は質問に回答させていただきます。

### 高校入学者から見た名大附

## 2. 進学校でない本校に入学した理由と 入学後に感じたこと

### ● 市外に通っていた中学生が名大附を知った理由

両親から、  
「学校説明会に参加してみない？」と言われた

### ● 名大附に入学したいと思ったのは

「自由な校風」と「総合学習が充実している」  
ことに魅力を感じた

受験を決意

まず、進学校でない名大附に入学した理由と、入学後に感じたことについてですが、そもそも私の場合は名古屋市外に住んでいたわけで、特に受験に関する情報がない名大附をどのように知ったかというところがあると思うのですが、他の中学入学の方と同じで、私の場合も両親から名大附の存在を覚えてもらい、「学校説明会に参加してみない？」と言われたのがきっかけです。学校説明会に参加して、自由な校風と、総合学習が充実しているということに魅力を感じました。そして受験することを決めて、ありがたいことに入学することができました。

## 2. 進学校でない本校に入学した理由と 入学後に感じたこと

### ● 学校の雰囲気

- ・先生と生徒の距離が近い
- ・生徒は、男女問わず、みんな仲良し

### ● 名大附生

- ・自分の考え、意見を持っている
- ・そして、主張できる生徒が多い

中学時代に過ごした環境との違いに驚いた

入学後にまず感じたことは、学校全体の雰囲気として、先生と生徒の距離がとても近くて、生徒同士は男女問わずみんな仲良く、和気あいあいとしているという印象が強くありました。また、名大附の生徒は、先ほど、中山先生のお話で個性のぶつかり合いというお話があったかと思いますが、自分の考えや意見を持っている方が多くて、そしてそれを授業などの発表する場で、しっかり主張できる生徒が多いなと感じました。これは私の個人的な意見ですが、内部進学者に特に多かったように思います。これらのことは、私自身は公立中学校でありこういう経験をしてこなかったので、中学校時代に過ごした環境との違いに、当初はかなり驚きました。高校に入学した当初は転校生の気分というか、すごい所に来てしまったなというちょっと不安な部分というか、大丈夫かな、やっていけるかなという思いもありましたが、すぐに順応できて、その後は居心地良く3年間を過ごすことができました。

## 3. 高校受験が無いことのメリットとデメリット

高校受験者  
からの視点

自分の興味や関心のあることを継続できる

→高校受験で好きだった習い事を続けられなかった



自分の興味のあることを通じて、  
将来の目標に狙いを早くから定められる

高校受験がなかったことのメリットとデメリットということですが、高校受験者からの視点でお話ししますと、高校受験がない場合、自分の興味や関心のあることを継続してできる点がやっ

ぱりメリットだと思います。私自身、小学校から続けてきた習い事がありましたが、受験期に学習塾に通う時間が増え、続けられなくなってしまいました。受験していなかったら、たぶん続けていただろうなと思います。

また、もうひとつ感じたことは、私の場合は中学校生活のひとつのゴールとしての高校合格・高校入学だったわけで、高校に入学すると「受験が終わった。次の受験までちょっと休憩しよう。高校生活を楽しむぞ」という気持ちがあったのですが、名大附の中学から入学されている人たちの中には、早い段階から自分の興味のあることなどを通じて、将来の目標に狙いを定めつつある人が、高校入学の時点で一定数いたように思います。これは、高校に入学してちょっと驚いたことです。デメリットについては、あまりないのかなと思います。

#### 4. 大学に入ってから本校卒業生が 他校卒業生と違うと感じたこと

名大附卒業生は、

- ◆ 何かに熱中している人や将来の目標を語る人が多い
- ◆ 話が面白い。着眼点が面白い？ユニークな人が多い？

続いて、大学に入ってから、名大附の卒業生と他校の卒業生が違うと感じたところですが、これはかなり個人的な意見になるかもしれません。1点目は、名大附に通っている生徒さんは、何かに熱中している人だったりとか、将来の目標を語る人が多かったんじゃないかなと思います。私自身は、どちらかというところのタイプではなかったのですが、大学では、あまりそういう人はいなかったような気がします。

2点目は、名大附生は話がおもしろい。着眼点がおもしろいのか、ユニークな人が多いのか、ちょっと理由はわかりませんが、同じ話題について話しても、名大附生とお話ししていると、話の展開がおもしろいと思うことがよくあります。



## 5. 「研究職を志望したこと」への 本校での学習経験・生活経験の影響

### **高校時代**：研究職志望ではなかった

学部生時代に、指導教員に与えられた卒業研究テーマについて、研究を続けていくうちに、研究が面白くなり、研究を続けた結果、研究職へ

続いて、名大附での経験が研究職を志望したことへ影響したかという質問ですが、私自身は、高校時代は、研究者になりたいとは考えてもいませんでした。学生時代に、指導教員から与えられた卒業研究のテーマについて研究を続けていくうちに研究がおもしろくなり、続けた結果、いろいろなお縁で現在研究職に就いています。なので、研究職を志望して研究者になったわけではなく、そのときそのときで選択していった結果、研究職に就いたので、この質問は飛ばさせていただきます。

## 6. 「研究テーマ」や「研究能力」への 本校での学習経験・生活経験の貢献

レポート課題に抵抗を感じなかった  
周りの友人：レポート課題に苦しんでいた



名大附では、自分自身でテーマを設定し、  
調べ学習をする機会が多かった

**このスキルは、大学生活で大変役立った**

次に、名大附での経験が、研究テーマや研究能力へ貢献したかということですが、これは、名大附に通っていた私の友達みんなが言うことです。大学に入るとレポート課題が多くあります。大学の周りの友人というのはレポート課題に苦しんでいましたが、私はそれほどレポート課題に抵抗を感じませんでした。むしろ、筆記テストよりレポート課題のほうが好きでした。名大附では総合人間科をはじめ、夏休みや冬休みの宿題など、自分自身でテーマを設定して調べ学習をする機会がとにかく多くありました。今振り返ると、それで気付かないうちにトレーニングされて

いたのだらうと思います。これらのスキルは、大学生活では大変役に立ちました。そして、その後の研究生活が続くきっかけにもなったのかなと思っています。

## 7. 本校固有の教育的風土や学校文化は何か

- 自由な学校
- いろんなタイプの生徒がいる
- 先生も周りの生徒も、個々の興味や考え方を尊重してくれる

名大附の教育的風土と学校文化についてですが、最初に少しお話ししましたように、私の場合は、自由な校風に引かれて名大附に入学を希望しました。実際3年間通ってみて、名大附はやっぱり自由でした。少し質問からは話がそれるかもしれませんが、私個人としては、自由とは自分で考えて選択しなければいけないということなのだ、名大附のいろいろな行事やプログラム、いろいろな場面で学んだ3年間でした。また、いろいろなタイプの生徒さんがいらっやって、先生や周りの生徒も、個々の興味や考え方を尊重してくれる雰囲気が強くあったように思います。

### 新たな一歩を踏み出す勇氣

## 8. その他言いたいこと

**名大附 → . . ? . . → 研究者**

- のびのびとした高校生活
- 贅沢な環境 (← 当時は理解していなかった)
- いろいろなことにチャレンジしてみようと思えるようになった

**名大附 → → → 現在の私**

こちらが最後のスライドです。その他に言いたいことということで、私自身、名大附で過ごした3年間で、今回のテーマである研究者養成にどう貢献したかというのは、直接的にはわからな

いですが、名大内を堂々と毎日歩いて、大学の先生の授業も受けられたりするという、ぜいたくな環境で伸び伸びと過ごせた高校生活は、大変貴重な時間だったと思います。


あとは、名大附で過ごしたことにより、いろんなことにチャレンジしてみようと思えるようになりました。これは、名大附で高校生活を過ごす中で、新たな一歩を踏み出す勇気が、知らず知らずのうちに育まれたのかなと思っています。ということで、名大附で出会った友人と、名大附で経験したことが、今現在の私のいろいろな生活に影響をもたらしているということは確かだなと思っています。

オンラインシンポジウム

受験学力形成を目指さない中高一貫教育は  
研究者養成にどう貢献するのか

—名大教育学部附属中・高等学校出身者による  
「中高大院」接続シンポジウム—

2021. 1. 30 13:00-15:00



奈良大学 文学部 文化財学科・教授

千田嘉博

### 中学生のお城博士

#### 1. 現在の専門と研究内容

- ・名大附属中学 1 年生の夏休みに同級生と出かけた旅行で、姫路城を駅から遠望して感動。旅行から帰って名古屋市瑞穂図書館の城の本を読破して、城の研究者になると決める。
- ・中学・高校では、民間の愛好団体・東海古城研究会に入って週末ごとに山城探検。先生から「千田は学校の勉強をしよう」と言われつづけ、友人からは「お城博士」と呼ばれる。
- ・奈良大学の文化財学科に進学。すでに 6 年間城跡調査を重ね、学会誌も精読していたので、突然、優等生に。好きなことをとことんできる大学は、なんてよいところだろうと思う。

まず、現在の専門と研究内容ですけれども、これは本当に名大附属とすごく深く関わっています。名大附属には中学から入ったんですけれども、1 年生の夏休みに同級生と旅行に出かけようと、それまで親と一緒にしか旅行に行ったことがなかったのですが、もう自分たちは大人だからねとって、小豆島・淡路島の旅行に行きました。その道中で、姫路駅から姫路城を見て感動したんです。



何てすごいものがあるんだろうと。この旅行から帰って、名古屋市の瑞穂図書館って、今もあるんじゃないかと思うんですけども、そこにあったお城の本を全部読破したんですね。それで、お城の研究者になるというふうに、そのときに決めました。

中学・高校で、あんまりお城のことって授業があるわけではありませんし、当時はまだ、お城を考古学で研究するという学問分野そのものが確立していない時代、なかった時代でしたので、当時、今もあるんですけども、愛知県辺りのお城の愛好団体、東海古城研究会という所に、中学生で入れてもらいました。周りは大体、オーバー 60歳とか70歳のおじさんばかりですよ。そういう所で超かわいがってもらって、週末になると電話がかかってきて「千田君、一緒にお城に行こうよ」「じゃあ、名鉄の何々駅前で待ち合わせ」といって、お城へ連れていってもらおうという超英才教育を受けていました。

その結果、附属の先生からは、「千田は、お城のことはいいから学校の勉強をしよう」と言われ続けたんです。しかし、友人からは「お城博士」というふうに、そのときから言ってもらっていて、その方面にまい進しておりました。

その後、大学は奈良大学の文化財学科、今の勤め先であります。そこに進学をいたしました。もうすでに中学1年生からお城の調査・研究を重ねていて、しかも学会誌なんかも読んでいたりしたものですから、大学に入ったら突然優等生になりました。そして、好きなことをとことんできる大学というのは、何て素敵なお所だろうというふうに、当時実感いたしました。

## 1. 現在の専門と研究内容

- 大学院への進学を予定していたが、名古屋市の学芸員の公募があったので受験。学部卒で学芸員になるのは当時きわめて稀。名古屋市見晴台考古資料館の学芸員になって、4年間勤務。発掘しつつ城の研究論文を学会誌に投稿。
- 国立歴史民俗博物館 考古研究部 政治遺跡研究部門の助手公募に応募して採用。学部卒で26歳の着任は異例。その後、ドイツ・イギリスに留学。大阪大学で博士（文学）の学位を受けて助教に。15年間勤めた後、恩師の研究室を受け継いで奈良大学へ。2015年に濱田青陵賞受賞。
- 日本と世界の城を考古学から研究している。

いよいよ大学卒業が迫ってきてどうするかというときに、大学院への進学を予定していたんですけども、ちょうどそのときに名古屋市の学芸員の公募がありまして、受験してみたんです。そしたら受かっちゃったんですね。200人ぐらい受けていたんですけども。当時、学部卒で専門の学芸員になるというのは非常にまれなことだったんですが、なぜか受かりました。それで、名古屋市の見晴台考古資料館の学芸員になって、4年間勤務しました。毎日発掘しながらお城の好きな研究をして、論文を書いて学会誌に投稿するということをしておりました。

4年間勤めたら、今度は国の新しい博物館、千葉県佐倉市にあるんですけども、国立歴史民俗博物館の考古研究部という所の政治遺跡研究部門で、助手を公募するというのが出ていましたので、応募してみようと思って応募したんですね。そしたら採用していただいた、受かったんです。これも当時は、もちろん学位を持っている方とか、大学院を出た方ばかりが受験していたわけですから、学部卒しかも26歳で博物館助手として着任するというのは大変異例なこと、一体どういう人なんですかとよく言われました。研究室が与えられたんですけども、その研究室にいたら、やってきた事務の人から「千田先生はどこにいますか」と聞かれたことがあります。先生のところに来ている学生だと思われていたぐらい、先生らしくなかったんですね。その後、おかげさまでドイツやイギリスに留学させていただいて、博士の学位請求論文を書いて、阪大で学位を頂戴したということです。

この博物館に15年勤めたんですけども、奈良大学で習った恩師の先生がご退職ということになりまして、その研究室の後に来ませんかと言っただいて、今は奈良大学に勤めております。2015年には濱田青陵賞も頂戴いたしました。今は日本と世界の城を考古学から研究しています。



これはモンゴルの城なんですけれども、世界にお城がありますので、これはみんなで、学生なんかと、それからモンゴルの研究者やモンゴルの学生と、ゲルという簡易のお家を草原にパカッと建てまして、1カ月ぐらい夏休みずっと、発掘をするというのを続けていたりしております。

## 2. 進学校でない本校に入学した理由と入学後に感じたこと

- 両親が名大附属がいかにすばらしいか勧めてくれ、入学することになった。
- 中学に入学してみると、2クラスで学年全員の顔と名前、性格がわかり、とてもアットホームで伸び伸びと自由にすごせた。魅力的な授業をされる先生方。先生もとっても個性的。
- 中学1年生の夏休み明け以降は、かなり特異な生徒だったと思われるが、まったく問題なく許容された。生徒それぞれの個性を尊重し認める意識は、先生方だけでなく生徒にも共有されていた。

進学校でない本校に入学した理由と、入学後に感じたこと。そもそもは両親が、名大附属というのがいかに素晴らしい学校かということを話し、勧めてくれて、入学することになりました。入学をしてみますと、当時、今もそうでしょうか、2クラスで、同学年の生徒全員の顔も名前も性格もわかる環境でした。そして、とてもアットホームで伸び伸びと過ごせるということを感じました。

また、先生方が非常に魅力的な授業をされました。これもすでにお話が出ていましたね。先生方もとても個性的な方ばかりで、今でもいっぱい思い出します。私自身は最初に申しましたように、中学1年生の夏休みにお城が好きになっちゃって、もう中学校の勉強も高校の勉強も全然ほほしないという、かなり困った生徒でありまして、なんていうか、学年でもかなり特異な存在だったと思うんです。しかし、これが名大附属のすごくいいところだと思うんですけれども、それが全く問題なく許容されました。さっきも言いましたように「お城博士!」とか言ってもらって、何となくちゃんと居場所がある。生徒それぞれの個性を尊重し認め合う、そういう意識というのが生徒間にも、それから先生方にもあったんですね。単純に見たらただの劣等生ですよ。だけれども、ただの劣等生という感じで接せられるわけではないという、大変それは素晴らしいことだったというふうに思います。

## 3. 高校受験が無いことのメリットとデメリット

### 【メリット】

- 中学1年生からお城研究にまい進して突出できたのは、高校受験が気にせず済んだから。そして中学3年生の夏休みには、同級生と山城と戦国期城下町の調査隊を結成して、泊まり込み調査をするなど、高校受験を気にせず、一緒に自主的な活動を展開できた。

### 【デメリット】

- 個人の責任だが、あまりにも好きなことに特化しすぎた。惨憺たる中学・高校の成績。

高校受験がないことのメリット・デメリットなんですけれども、メリットは私の場合、中学1年生からお城研究に超まい進した、そして突出することができたというのは、やっぱり高校受験

がなかった、それを全然気にしていなかったからだと思います。また、附属のいいところだと思うんですけども、もう中学3年生ぐらいになると、千田はお城が好きということ、みんな知っているわけです。先生も生徒もみんな知っている。そうすると、友達と夏休みに、山城と戦国期の城下町の調査をしようじゃないかと、三重県まで遠征して行ったんですけども、泊まり込みでガチの調査をしてくるという、こういうことに一緒になって、おもしろがって付き合ってくれるということがありました。「自主的・主体的な活動をみんなでやろう」「それ、おもしろそうだから俺も一緒に行くよ」というふうに言ってくれる友達がいたというのは、本当に良かったと思います。

デメリット。これは、千田の場合は非常にはっきりしています。あまりにもバランスが悪かった。個人の責任ではありますけれども、好きなことだけに特化し過ぎていたというのは、今も反省しております。惨憺たる中学校・高等学校の成績でありました。申し訳ありません。

#### 4. 大学に入ってから本校卒業生が 他校卒業生と違うと感じたこと

・本校の生徒の上品さ、バランスのよさは強く感じた。校内でいじめもなく、ひどくグレる生徒もおらず、すくすく成長した感じ。

・たいへん大きな特色だと感じたのは、成績で人を評価する指標だけでなく、成績以外の指標で他者を評価する意識を、本校の生徒が共有していたこと。

大学に入ってから、本校卒業生が他校の卒業生と違うと感じたこと。パネリストの先生方からそれぞれすでに出ていますけれども、ひとつは、やっぱり附属の生徒の皆さんはすごく上品だったんだなというのを実感しました。それから、すごくバランスがいいなのも感じたところ。実際に通っていた間も、中学・高校とありましたけれども、学校内でいわゆるいじめに相当するようなことというのは全然ない。それから、ひどくグレているような生徒もいない。みんな、すくすく成長しているという感じですよ。

その中でも、大変大きな特色だなというふう感じたのは、これも先ほどの話と重なるわけですけども、いわゆる中学校のとき、高校のときというのは、当然、生徒を評価する一つの非常に大きな指標として、成績というのがありますよね。学校の成績がすごくいい、数学ができる、英語ができる生徒というのは、やっぱり尊敬を集めます。もちろんそれは当然のことなんですけれども、私自身の体験からいうと、附属の場合は、もちろんそれはあるんですけども、成績以外の指標で他者を評価する意識というのが、生徒にも、それから先生にも、みんなに共有されていました。大学に入ってから、実際に他の学校から来た人たちと接する中で、附属にはそういうすごいところがあったんだと改めて実感したというところ。



## 5. 「研究職を志望したこと」への 本校での学習経験・生活経験の影響

- 私の場合、これはきわめて大きかったと考えている。
- 「城の研究者になる」という決意を、名大附属の先生方も友人も等しく応援してくれて、まったく違うことに熱中している者を、仲間として受け入れてくれた。
- 中学生のときの修学旅行で、一乗谷朝倉氏遺跡の発掘現場を見学し、飛騨高山（もともとは城下町）、高校で萩・津和野をグループ見学できたのは、研究やフィールドワークの楽しさを実感するすばらしい機会になった。

研究職を志望したことへの、本校での学習経験・生活経験の影響ということなんですけれども、これは私の場合、大変大きかったというふうに考えております。城の研究者になるという、中学1年生の夏休みの決意を、名大附属の先生方も友人も、みんな等しく応援してくれました。成績は全然いい子じゃなかったんです。お城のことばかりやっていたわけですから。全く違うことに熱中している者を仲間として受け入れてくれて応援してくれるという、やっぱりそういう環境があったから好きなことがとことんできた、環境が原動力になっていたと思います。

それから名大附属は、授業はもちろんですけれども、さまざまな活動が学年暦に組み込まれていました。現在とはいろいろ違うところがあるんじゃないかと思うんですけれども、たとえば中学生のときに一乗谷朝倉氏遺跡、これは国の特別史跡ですね、戦国期の城下町では最も調査され整備されている所なんですけれども、この実際の発掘現場を学校行事で見学させていただきました。そして飛騨の高山、これはもともと城下町ですから、そういった所でグループワークをしたり、あるいは高校で萩や津和野へ行って、これもお城の城下町ですよ、そういった所を実際に尋ねることができたというのは、私にとって、研究やフィールドワークの楽しさを実感する素晴らしい機会になりました。

## 6. 「研究テーマ」や「研究能力」への 本校での学習経験・生活経験の貢献

- 中学1年生の夏休みに、「中学生になったから我々はもう大人である」という誤った認識にもとづいて、友だちと旅行に出たのがすべてのはじまり。今考えれば無謀だが、先生も応援してくれたのはありがたかった。
- 当時、文系、理系とあまり厳密に区分せず、理系の教科もできないなりに学習したのはよかった。大学進学以降に、考古学だけでなく、さまざまな計測機器を用いたり、保存科学や、地中・空中レーダー探査などに、強い興味と関心をもって取り組めた。

研究テーマや研究能力への、本校での学習経験・生活経験の貢献ですけれども、これも私はやっぱり附属に学んだからこそ、今日、こういう研究者として生きているんだという思いを非常に強く持っています。何ととっても、先ほどお話ししましたように、中学1年生の夏休みですね。中

学生になったんだから、われわれはもう大人であるという。これは全くの誤解です。誤った認識なんです、それに基づいて友達と一緒に旅行に行こうじゃないかといって、自分たちで計画を立てて、姫路城を見たというのが全ての始まりだったわけです。今、考えてみれば、全く無謀なことだったんですけれども、一緒に行こうと言ってくれる友達を得ることができたというのは、本当に幸せだったというふうに思います。

もう一つ、学習ということでは、当時、これも今といろいろ違うところはあると思うんですが、附属では、高校になってからも文系や理系というのはあまり厳密にガチッと区別してなくて、随分、理系の教科もできないなりに受けていました。これは、結果としてはとても良かったと思います。今の考古学というのは、いわゆる人文系の研究の方法だけではなくて、さまざまな理系の分野の研究手法や分析機器を使いながら、研究を進めていくということが非常に進展しております。そういった分野に対しても、強い関心や興味を持って取り組むことができたというのは、やっぱり中学時代、高校時代、決して成績は良くありませんでしたけれども、そういうことを一緒に、できる子たちと勉強したということが良かったと思っています。

## 8. その他言いたいこと

- 本当に自由で、よい学校で学んだと実感。多くの友人たちと先生方に心から感謝申し上げたい。中学や高校の学習を越えて、社会科の先生方は、史料の読み方などを教授してくださった。
- 附属の先生には学界で知られた研究者がおられ、たくさんの論文を執筆しておられた。そうした先生方の姿に、勉強の先の研究の楽しさを実感できた。身近に研究の楽しさを体現してくれる存在がいたのは幸せだった。
- 自分の好きなことを伸ばしていける附属の環境を大切に活かしてほしい。

その他、言いたいことなんですけれども、やっぱり名大附属という自由で、良い学校で勉強させていただけたんだなというのを、しみじみと実感しております。これは先ほどから何度も申し上げていることなんですけれども、非常に優れた多くの友人たち、あるいは先生方に本当に感謝したいと思いますし、中学や高校のときには、学校で教えるということを超えて、特に私が好きだった歴史関係の事などを、社会科の先生方に、たとえば史料の読み方などを教えていただけたというのは、本当にすごく素晴らしいことだったと思います。

もう一つ言いたいことは附属の先生方に、私が習っていた頃ですが、歴史系の分野で研究者としても知られた先生方がおられて、たくさんの論文を執筆しておられました。ですから、非常に身近な所に研究者がいたということになります。そういった先生方の姿から、勉強の先の研究ってこんなにたのしいんだ、ということを実感できたというのも、とても素敵なことだったと感じています。今、附属で学んでおられる皆さんには、自分の好きなことを伸ばしていける、この附属の環境というのを大切に生かしてほしい。これは特別なことなんだということを、実感していただけたらいいなというふうに思っております。

### 3. コメンテータ総括

根本 二郎 氏

#### 多様な価値観を認め合う社会

私は高校から入った名大附属を1976年に卒業して、それで名古屋大学経済学部に進学しまして、そこから経済の大学院に進みました。高校入学以来44年にわたりずっと名古屋大学にいます。

4人のパネリストの方からは、聞いていて感動してしまったんですが、素晴らしいプレゼンをいただきました。自分のことを言うときだぶ格調が落ちるんですけども、お話しさせていただきました。附属高校に入るときの動機というのは、皆さんはご両親の推薦なんですね。私の両親は、附属高校を知りませんでした。私が見つめてきました。どうしてかという、私は中学校の内申書の点がすごく低くて、名古屋市立とか愛知県立の高校にはとても行けなかったんです。だから、どこか入れる学校はないかと思って探して見つけたのがこちらだったということで、それで拾っていただきました。

僕、小学校のときは落ちこぼれで、友達はいないわ、学校でも一日誰ともしゃべらないわという生活をしていまして、これではいかんというふうに、小学校5年6年の頃に強く思いました。何とかしたいと。そうしていろんなことをしたんですけども、中学校1年ぐらいのときに、もうコミュニケーション能力はとことんないので、まあ今でもないんですけどね、ないので、もう大学の研究者になろうというふうに思いました。それで、専門分野よりも何よりも大学の研究者、それも研究室にこもって、誰ともしゃべらなくても何とか生きていけるというのをやろうと思ひまして、専門分野を決める前に研究者になることを決めました。

しかし、研究者になるのには、そこそこいい大学へ行かなきゃ駄目だろう。だから、ある程度の進学校には行かないと駄目だろう。だけれども、内申書は悪くて、公立高校は行けないぞという状況で、名古屋大学附属高校を選びました。したがって、高校3年間は受験勉強を一生懸命やろうと思って入りました。自由な校風ということは知っていました。大学の教員に、研究者になるんだから、大学に近い所の高校がいいだろうと、そういうことも考えました。それで入りました。

入ってびっくりしたことが一つあります。僕は教育の専門家ではないので、スクールカーストという概念はちゃんと説明できないんですけど、階層というか、教室の中、生徒の間にそういうカーストみたいなものがないんです、附属は。僕が前にいた中学校も、随分自由な学校だったと思うんですけども、カーストは厳然としてありました。コミュニケーション能力のすごく高い子がやっぱりトップ層にいて、全然誰ともしゃべれないような、僕みたいなのが一番下層にいるという世界でしたけれど、附属にはそれがなかったんですね。もちろん、カーストのあるなしというのは、必ずしもいじめがあるとかないとか、あるいは学校がすごく差別的であるとか、そういうこととはまた少し別のことだと思うんですけど、人間の社会を形成する限りは、そういうカーストに相当するものというのが、どんな社会でもできてくると思うんです。だから、附属にもあったろうとは思っただけけれども、それが非常に弱かった。だから、ものすごく生きやすかったです。

多くの先生が言われているとおり、他人の「自分の尺度」、「自分のものさし」、単一の価値観でないものをみんなが共有する、単一でない多様な価値観を認め合うという社会でした。先生も

生徒もそうでした。これは大変不思議です。こんな社会は、高校に限らず実社会になったら、ほとんど期待できないぐらいのことだと思います。

しかも、自由な校風ということをおっしゃったけれども、僕、高校のときからそう思っているんですが、「自由を勝ち取るぞ」とか、それこそフランス革命みたいに「自由な社会をつくるぞ」とか、学校の先生も、「自由で伸び伸びとした生徒を育てる学校をつくるために、一致団結して頑張ろう」とか、そういう空気がないんです。それは良い面と悪い面があるのかもしれませんが、自然にできていた。空気として、環境としてできていました。風土と言ったらいいのかもしれませんが。これがなぜできたかということは、僕は教育学者ではないですけども、研究する価値のあることだなと思います。本当に高校は楽でした。

そういうわけで僕は、とにかく大学院まで行くんだからいい大学に入ろうと思って、受験勉強を一生懸命やるつもりで入りました。僕は名古屋大学に合格させてもらいましたが、進学校に行っていたら名古屋大学に行けなかっただろうなと思います。なぜかという、コミュニケーションの駄目な人間って、結局、たとえば塾に行っても駄目なんですよ。一定のペースでみんなと一緒に勉強していく、先生に教えられたとおりに何かしていくということはできなくて、自分でやらないと駄目なんです。それをわかっていたんです。それも実は、附属高校には期待していましたけれども、3年間、本当に好き勝手に勉強しました。

僕は、受験勉強は自分でデザインしました。予備校もほとんど行きませんでした。親がお金を払ったから、2回か3回は行ったような気がするんだけど、それでも好き勝手にやって名古屋大学に入れた。だから、実は受験にも強い附属高校と言っちゃうのかな。人と同じことをやっていたら駄目だよというのに、世の中の進学校とか進学教育は、人と同じことをさせるんですよ。人と違うことを、僕は本当に高校3年間とことんやりました。同級生の方々には、沼野さんがおられるけれども、いろいろ迷惑を掛けたかもしれないですけど、その学校の校風で許してもらってきました。

## 4. ディスカッション

### 中高生の頃の自分にとって、「研究」とは

根本：まず、4人の先生方に共通でお聞きしたいと思います。千田先生はとにかくもう、中学校1年のときから研究者になるぞという勢いでいかれたということだけでも、他の先生は必ずしもそうではない。ただ千田先生も、中学校・高校、附属学校におられたときに、研究ってどういうものだったかということをお聞きしたいんです。というのは、職業を選択するときに、普通の職業と 目指すというのは特別な子たちだけじゃないかという見方もあると思うんです。たとえば、菊田さんは、高校のときは別に研究者になるつもりはなかったというようなお話なただけでも、研究者というのは他の、たとえば会社に入る、小学校や中学校の先生になる、公務員になる、あるいはお医者さんになるとか、そういう職業選択の中で、特別なものだったかどうかということをお伺いしたいんです。中高生のとき、研究ってどういうものだったのか。いかがでしょう、順番に行きますか。中山さんから行ってもいいですか。

中山：はい。たぶん、研究者や科学者に対しての憧れは、僕にはあったと思うんです。中学とか高校時代に。だから、アルバムとかを振り返ってみると、研究者や科学者になりたいですとか書いてある事実はあるんですよ。ただ、そういう事実はあったとしても、イメージとはまた全然違って、そこまで具体的に考えずに言っていたので、そういったものはなかったと思います。それで答えになっていますか。

根本：じゃあ、一通りお伺いしてからにしましょう。順番で行くと、沼野先生。

沼野：私も研究者になるつもりは、中高のときは全くなかったというか、文学を研究するということがどういうことなのかというのも、ちょっと想像できなかったですね。

根本：それじゃあ、菊田先生はいかがでしょう。

菊田：スライドでお示したように、研究者になるつもりは、私自身はありませんでした。ただ、私の頃は「学びの杜」とかいろいろ、大学の先生が高校に来て授業をすることがよくあって、その先生たちがすごくおもしろく授業をしてくださるんです。ちょっと内容がハイレベル過ぎてわからないときもあったんですけど、大学の先生方はご自身の研究をたのしそうにお話しされていて、研究ってたのしいのかなというふうに当時は思っていて。なりたいたとは思っていなかったんですけど、一般の高校生と比べると、研究者は、遠い存在でもなかったのかなとは思っています。

### 研究者に「基礎学力」は不可欠

根本：ありがとうございます。千田先生は、もう研究者になるんだぞと思っておられたというこ

となので、ちょっと違う観点からお聞きしたいんですけども、研究者になるのって、やっぱり基礎学力って要るだろうと思われませんでしたか。

千田：要りますよね。研究者になって本当にそう思いました。だから、随分年を取ってからドイツとかイギリスへ留学に、文部省に当時あった在外研究員で出してもらったんですけども、もう一回、英語とかドイツ語って死ぬかと思いました。基礎学力はすごく大事です。だけれども中学・高校のときは、好きなことだけやっていた、という感じでした。それは反省ですね、人生の。

根本：僕は、とにかく研究者になろうと思って高校に入って、それで、研究者って一体どういう大学を出ているかって見ると、東大とか京大とかいるわけですよね。だから、僕はこういう基礎学力は絶対に要るだろう、それがないと研究者にはなれないんだと思っていましたから、受験学力であれ何であれ、やらなきゃと思って嫌な勉強でもしていたんです。

千田：根本先生、やっぱりそれは正攻法ですよ。私は全然正攻法じゃないですからね。本当に申し訳ありません。

根本：いや、そうじゃなくて。それでも大学の先生になっているわけですから、それをどうやって乗り越えてきたのかなというのが、僕は不思議なんです。

千田：それは、本当によくわからないんですよ。さっきもちょっとご説明したように、大学ではないですけども、たとえば学芸員になるのも、当時だと当然大学院の修士ぐらいは出ていないと、入口にも到達しないというのが普通でした。だから、普通だったら駄目なんですけれども、採ってくださったんです。もちろん名古屋市なんかのときも、公務員の教養試験みたいなのが一次でありますから、それはやっぱり、なぜか知らないけれども点が取れたんですよ。不思議です。それは附属中高の教育が良かったからかもしれません。

根本：中山先生は、数学、英語、あるいは物理みたいなのは、高校のときから好きだからというので、すごく勉強されたんですね。

中山：特に英語とか数学は、かなりやっていました。

根本：それは別に、研究者になるぞということのためにやっていたわけではない？

中山：全くそれはないですね。それは違います。今、この話を聞いて思うことは、この中では、研究をやるぞと思っていた人と、結構悩んでいた人たちがいたんだということです。僕はむしろ、何をやりたいんだろうと思っていたので、四苦八苦している中で、でもおもしろいと思っていることは勉強したいという気持ちがあったからこそ、英語とか数学。だか

ら、全く研究者になりたいという気持ちはなかったです。

根本：研究室に入って、最初は機械航空に行かれて、卒業研究をしたり、研究室で仕事をしたりするときも、そんなに抵抗はなかったと。基礎的なことはこなせるし。それから今度は海洋研究のほうに行くとなっても困るということはない、みたいな感じですかね。

中山：もちろん大変なことはありますし、新しい分野だとすごく大変なところはあるんですけども、ただ一番上に行かないと、僕は次が見えないと思っているので。今もたぶんそうで、別に僕はこれから30年、研究者でい続けようとはまだ思っていないくて、取りあえず、自分でこの上何ができるのかというのがわかったときに、次のステップが見えると思っているんです。なので、そこまではしっかりやらなきゃいけないという。もちろん、今やりたいことがあるからそこまでやるんですけど、その先に行くには逃れられないステップなので。

根本：沼野さんにお伺いしたいんですけど、同級生なので実は共通の先生なんですが、僕は附属高校のときに、ある先生に「受験勉強はしなくても、こういう自由な授業でも受験に対応できるようにはなるんだ」と力強く言われたことがあるんです。具体的な先生の名前はここでは言わないですけど。どう思われますか。

沼野：そうですね。回り回って何が何に影響しているか、どこにどう因果関係が繋がっているのかというのは、なかなかわからないですね。後になって、「あそこがああだったから、今がこうなっているんだ」というのは、後付けのことが多いので。どうなのでしょう、そのときに先生にそう言われても、「はい、そうですね」とは言えなかったかもしれないと思います。

ただ私の場合は先ほど申し上げたように、研究者というのは、遠い憧れの存在ではあったけれども、まさか自分になるというふうには思ってもみなかった職業でした。むしろ、どちらかというとな性は経済的な基盤を得て独立し、男性と同等に働くべきだと考えていたんです。

大学を卒業して放送局に就職したんですけども、その後もろもろの事情があって、アメリカに行き、そこで日本語教育の仕事をさせていただきました。ところが、やはりどうしても、これが本当に私のやるべきことだと思えないんですよ。英語を使って日本語を教えるという教育はおもしろかったんですが、「どこか違う」と思い、じゃあ何だろうと考えたときに、いつもロシア文化に関心が戻っていくというのがあって、本当に好きなのはロシアなんだとわかりました。

私はいろいろと回り道をしていて、自分のやりたいことを見つけるのに時間がかかりましたけれども、最後にそういうのが見つかって良かったと思っています。見つかったのはもしかすると、さっきお話したとおり、土台として名大附属の中学・高校のときの先生方とか、友人たちが本当に好きなことをやって、多様な価値観を認め合っていて、それが影響したのかもしれない。

根本：ありがとうございます。菊田さんは、とにかく高校のときは、研究者になるなんてことは思いもよらなかった？

菊田：はい、そうですね。

根本：だれれども研究者に、成り行きというか、流れて「ここに着いた」みたいな感じなんだけど、その過程で乗り越えられないことはなかったわけですよね。ここまで来たんだから。

菊田：そうですね。興味のあることとか、自分自身については、けっこう壁があっても頑張れるタイプだったので。私、今はケニアで仕事をしていますけれども、高校時代は英語が全然駄目だったんです。今も得意ではないですが、やっぱり海外でやっていくために必要だとすれば、その壁は頑張って乗り越えようと。

根本：たとえば他の高校とかを出てきた子で、すごく受験勉強で鍛えられているような人たちを見て、高校のときに、あんなに鍛えられていれば良かったなと思ったことはありませんか。

菊田：うーん。まあ、やっていれば、大学に入って研究をしているときに苦勞しなかったかなとは思いますが、名大附のほうが良かったなとは私は思っています。

根本：ありがとうございます。1人で2つの経験はできないから、比べることができないんですけども。さっき、名古屋大学の経済学部で40年いるという話をしましたが、僕の専門は、計量経済学という統計学なんです。統計学で経済のデータを解析するというので、ずっと1年生の統計学を教えてきているんです。

それで思うのは、名古屋大学附属高校から上がってくる子が、何でこんなにできるのかなということです。正直、統計学ですから数学も使うし、基礎学力が本当は要る。だから、有名進学校を出てきたような子がきっとできるんじゃないかと思うと、経済学部で見ている限りは、名古屋大学附属高校の、特に推薦入試で入ってきた子が多いんですけど、ことごとくトップクラスになります。本当にトップだった人もいるし、それは驚きます。で、ガリガリ勉強して、数学でも英語でもやってきたはずの他の高校の子と比べて、他の高校の子が駄目だということではなくて、それに伍して全然負けないと。

それに加えて、先ほどからいろいろとお話いただいた、たとえば自分の意見を言える高校生とか、自分のコアになるようなテーマを持っているような高校生なんですよ、みんな。経済学部ですから、社会について非常に熱心な関心を持っている子たちもいます。ちなみに、僕はそんなことは全然なかったから、僕は附属的じゃないんですけど。そういう子たちを見て、正直びっくりしました。もう随分名古屋大学で教えていて、それが1人じゃなくて、次から次へ出てくる子も出てくる子もそうなんです。

それから、パネリストの皆さんは、海外経験はかなり早い段階で行かれていますよね。中



山さんは、もう大学のと時から手を挙げて、ミシガン大学に行くということをされているんですけども、それはなぜと聞いてもしょうがないんですけども、やっぱり附属にいたことと関係ありますか。開かれた世界に出ていくぞという、前向き、積極的という感じは。

### 海外に出てゆこうと考えた理由

中山：附属にいたことが、おそらく関係はあるんだと思います。本当にそれをやりたいのかわからなかったの、何が起きているのか見てみたいという。もしその世界が好きだったら、そのままアメリカに残ってもいいぐらいの。だから、追究するということでは、附属というのは大きかったのかなと思います。あと、中高大と名大に10年もいたくないと思ひまして、そういう意味でも、附属に6年いたことは大きかったかなと思います。

根本：お気持ちは大変わかります。私は40年おりますけど。千田先生は先ほど、在外研究に行くときは、ちょっと苦勞したよというお話をされていましたが。

千田：語学は苦勞しました、もちろん。

根本：ただ、在外研究は行きたいと思っておられたんですね。

千田：もともとは、日本のお城のことを研究したいと思っていたので、外国は関係ないやと思っていたんですよ。ところが、国の博物館へ行きましたら、あそこは当時、大学共同利用機関という所の縛りでしたので、世界中の研究者が日常的に来ていて、世界にこんないっぱいお城があったのかと、ようやく気が付きまして、じゃあ行こうと。それで行ってみましたという感じです。ですから、そこはあまり壁は感じませんでした。

根本：沼野さんは、最初から世界に開かれたマインドをお持ちだったという感じ？

沼野：いえいえ、そんなことはないんですけど、やはりやりたいことがロシア文学ですから、ロシアに行ったりロシアの作家たちに会ったりしなきゃ仕方がないと思っはいました。英語は割と好きだったので、もう1つかもう2つ、外国語を勉強したいなというのはありました。

根本：菊田さんは、フィールドリサーチでケニアとかアフリカに行くというのは、研究室の命令で行ったんですか。

菊田：そうですね。そもそも私は、学生時代はインドネシアを中心に研究してて。その後いろいろご縁があつて、アフリカでやってみないかというお誘いがありまして、アフリカに行くことになりました。

根本：今どき、どこの研究室も、国際的なつながりはもちろん持っているわけなんですけれど、どっちかといったら、インドネシアにしるアフリカにしる、そういうフィールドに出ていくような研究をしたいなというのは思っていたんですか。

菊田：そうですね。日本国内にとどまるよりは、外の世界を見たいという思いが強かったです。

根本：実は、経済学部に来る、私が教えている生徒たちで、真っ先に手を挙げて留学したいというのは附属の子なんです。すごいなと僕はびっくりするんですけども、行ってみたいと。何でといったら、やっぱり外国を見たいということなんです。

## 質疑応答

平野（司会者）：フロアから質問をいただきましたので、ご紹介いたします。

「一般的に一貫校の場合、中学・高校・大学の進学は無条件ではなかったと思います。御校の場合、進学的前提として、成績や生活などについて、どのような条件があったのですか。また、御校の自由な校風の起源はどこにあるのか、どのようにしてその校風は形成されたのでしょうか。」という2つのご質問です。元附属学校長である大谷先生（コーディネータ）にお答えいただきます。

大谷：中学・高校・大学の進学はどうなっていたのか、条件はどうだったかですが、中学から高校は全員上がれます。そのままです。また、上がることを条件に中学入学を許可します。だから、高校に上がらない子は中学から入らないでくださいということになっています。それから、附属高校から大学は、本校特別の入学制度は一切ありません。普通と同じように。一般入試か推薦入試を受けて入るということです。

それから、先ほどから根本先生がおっしゃっている推薦の子がというのは、選抜性の非常に高い学校を受験してそのまま入れるような子が、名大に推薦で入るんですよ。推薦というと、予備校や公立の学校の関係者は、「一般入試では入れないから推薦で入るんだ」みたいな、悪いイメージを持っているんですけども、本校はそういうことはないんです。トップクラスの子が推薦で入っていきますね。高校自体が推薦を嫌わないので。

それから、自由な校風の起源はどこにあるか、どうやって形成されたかですが、これは実はわからないのです。非常にご高齢の卒業生の方のお話なども伺う機会があるので聞きますと、ひょっとすると、この学校は岡崎高等師範の附属だったんですが、その頃からの伝統的な校風をそのまま守っていて、発展させてきたのではないかと考えられますが、確かではありません。今後、あちこちの皆様からも教えていただいて、ぜひ解明したいと考えています。

平野：続いての質問です。大谷先生と根本先生に質問が届いています。「生徒はともかくとして、教師がなぜあれほど、いわゆる学習指導要領から逸脱して、好き勝手な教育をして許容されていたのでしょうか。今はどうでしょうか」というご質問です。

根本：附属高校の先生って、僕が見ている限りは、今はSSH（スーパー・サイエンス・ハイスクール）とかSGH（スーパー・グローバル・ハイスクール）をやっているからそうなんでしょうけれども、当時、僕が生徒だった頃というのは、一致団結して何かを達成するぞという一致団結感はなかったけれど、他の先生のやっていることについて、あれこれ足を引っ張ったりはしないということだったんだと思いますよ。その文化というのは、先ほど風土はどこから来たかという質問もありましたが、やっぱり大学の風土なんじゃないですかね。大学の風土が高校にも。大学と同じだというぐらいの感じじゃないでしょうか。

大谷：うちの附属は大学の中にあるわけですよ。東大の附属なんかは大学の外にあるんです。うちの中にあります。だから、受験なんかも一般の高校は、大学受験と入学というのは、高い塀を乗り越えて中に入るということだと思んですが、うちの子たちは高校のころからその中にいるんですよ。大学の先生の授業も見ますし、ノーベル賞の学者なんかもちらちら見て「昨日、生アマノ見ちゃった！」みたいに言っている子もいるわけです。そんな中で、良い意味で、大学の自由な文化が侵食しているというようなことがあるんだと思います。

ただ、教師が好き勝手やっているのかということになると、ちょっと違ってきます。この好き勝手は、今日は附属の先生方も参加していらっしゃるのですが、違うぞと言われるかもしれませんが、学習指導要領から外れて好き勝手なことをやるというのは、一部の県立の伝統校でもやっていたんです。ただ本校は、県立じゃなくて大学だったから相対的に自由にできていたし、根本先生がおっしゃったような文化もあったのではないかと思います。

今は、総合人間科の教育課程開発の指定を受けて、他ではできないことをやったり、それからSSHの学校指定科目を使うとか、そういうような形で独自のことをやっています。ですから、昔ほど「一人一人」が好き勝手ではなくて、むしろ「学校」独自の教育をやっているという方向だと思います。

ただ、やはり自由な校風というのはあって、それは染み抜きをしようとしても抜けない。染み込んでいるので、「学校」独自ということの中にも、やっぱり「一人一人」の先生方の創意工夫はなされていて、良い意味での好き勝手というのは、今も健在だといえるかもしれないというふうに思っています。

平野：今度はパネリストの皆様方全員に質問です。「皆さん、学校がとても好きでいらっしやっただことが伝わってきました。また、その経験が、研究に向き合う苦しさを乗り越えられる基盤になっていらっしゃるように思いました。多様性を認めてくれる雰囲気があったと皆さんはおっしゃっていましたが、学校生活を通して、自己肯定感を育てられたエピソードなどがありましたら教えてください。」エピソードまでお話しはできないかもしれませんが、簡単にお答えいただけるでしょうか。

中山：私の意見としては、特にそういう自己肯定感がというエピソードはあまりないんですけども、逆に言えば、さっき根本先生がおっしゃっていたように、足を引っ張らないというか、どうであれ意に介さない、どんな人も認めるというか、気に留めないという、そういう背景があったかなというふうに感じます。

沼野：自己肯定感につながるかどうかわかりませんが、私にとって大きな意味のあるエピソードとして、高校のとき、制服を廃止しようという話になったんですね。遠足のときに強行しましたよね、私たち。もちろん制服があったほうが良いという意見の人もいたんです。そういう人たちは、どうぞ制服を着ていったらいいんじゃないですかということでした。私は私服で行ったんですね。

多くの生徒が遠足に私服を着て行って、私たちとしてはしてやったりという感じだったんですけども、その後、制服が廃止されたかということにそういうことにはなりません。でも、聞くところによりますと、遠足の日には私服でよいということになっているとか？私たちの小さな抵抗運動がレガシーとして残ったと後で聞いて、うれしかったですね。当時、集会を開いて、生徒たちが自主的に意見を出し合って議論をした覚えがあります。以上、ささやかなエピソードでした。

菊田：私たちの頃は、遠足は私服でした。たぶん沼野先生たちのご尽力のおかげで、私服で遠足に行けるようになりました。ご質問の自己肯定感については、私もすぐに思い浮かぶエピソードというのはなかなかないのですが、やはりみんな自由に好きなことをやって、それを否定されない、「それもありだよ」みたいな環境があったんじゃないかなと思います。

千田：私自身は、高校のときだったと思うんですけども、文化委員というんですかね、今は名称が違うのかもしれませんが、当時は普通に文化祭と言っていたんですけども、とにかくそれをやるんだと、文化委員長をやりました。とにかく文化祭をやるのに、超熱烈にしていました。そういうやりたいことを、手を挙げたら実現できて、みんなと一緒にやっていくというのがすごくたのしくて、こういうことが達成できるんだというのを経験できたのは、すごくその後の研究にとっても、プラスになったというふうに感じています。

根本：沼野さんの制服の話、私は遠足当日に制服を着て行った少数派です。なぜかという、全員一致というのが気持ち悪かったので。でも、そうしたら他にもいました。制服を着た少数派が。でも、少数派だからといって、その後に排除されることはなかったです。附属らしいと思います。

沼野：そうなんです。そこが大事なんですよ。みんながみんな同じ方向を向くんじゃなくて、少数派も大事にするということですよ。

## 5. コーディネータ挨拶

大谷 尚

どうもありがとうございました。非常におもしろい話が何えて、あれやこれや、大皿や小皿にお料理がいっぱい並んできて、消化不良になるような感じです。でもみんなおいしそうで、全部食べたいけれども、とてもお腹に入らないというような感じです。記録は残りますので、文字化もいたしますし、紀要にもまとめていきたいと思ひますし、ちょっと分析するというか、検討したコメントなんかも付けて、紀要に載せさせていただきたいと思ひます。

先生方のお話の中に、重要なキーワードがたくさん出てきたと思うんですが、それらを全てつなぎ合わせて、諸要因の関連構造図みたいなものを作っていく必要があると思ひました。中でも、中核的な概念がいくつかあって、その中の一つは、多くのパネリストから出てきた「自由」という概念だと思うんですね。これは、「好きなことを伸ばしていける」などの異なる表現を含めると、かなり頻繁に出てきていました。

本校の卒業生で、学校医を務めてくださった歯科医師の先生が、こうおっしゃったことがあります。クラス会があったとき、「自分たちは自由について学んだのか、自由に学んだのか、どちらだ」という議論になったというんです。お酒を飲みながら、ワンワン議論をなさったそうです。その議論の末に出た結論は、「自分たちは自由に学んだ」ということだったというんです。

私は、これは素晴らしいなと思うんですが、学校という所は自由について教える所なんですが、自由にはさせてくれないというパラドキシカルな場なんですね。こういうパラドックスを学校というのは抱え込んでいて、そこから逃れられない。でも、それでは自由について学ぶことはできないんです。「自由というのはこういうもんだよ、わかりますか、テストに出すよ」みたいなことをしても、自由というのはわからないんです。自由は、自由にさせてやること、あるいは自由に学ばせることによってしか得られません。

私が最初に言ったお小遣いのこともそうですけど、自分で考えられるという自由を与えられると、自分で考えざるを得なくなるわけですから、それで自分で考える。自由に学ばせることによってしか、自由を学ぶことはできない。そうやって学んできたのが本校の生徒たちだし、今もそういうふうには本校の生徒たちは学んでいるんじゃないかなと思ひます。

この「自由」という言葉以外にも本当にいくつものキーワードが出ていて、とても今ここで私がまとめるというふうにはできませんけれども、またこれをきっかけにして、いろんなことを考えて、本校の良さを大学内外に発信して、高大接続につながるような豊かな学びが、本校以外でも実現することを願っています。

## 6. コーディネータによるコメント

名古屋大学大学院教育発達科学研究科特任教授／名古屋大学名誉教授  
附属高大接続研究センター 大谷 尚

### 1. はじめに

本稿で筆者は、このシンポジウムのコーディネータとして、シンポジウムについての若干の説明を記した上で、シンポジウムの内容についてのいくつかのコメントを述べることにする。

#### 1.1 シンポジウムの目的について

あらためて説明する必要もないと思われるが、このシンポジウムの目的は、研究者になるために必要な中高時代の教育を検討することではない。また、名古屋大学教育学部附属中・高等学校の良さを明らかにしてこの学校を賞賛することでもない。

筆者は40年の大学教員生活で、高校生が受験学力形成のための教育を受け、それを使って大学に入学してくるが、そのような学力は大学では通用しないと感じてきた。そのような学力が高校でどのように形成されるのかについては、名大生を対象としたアンケートで知ることができる。かれらの多くは高校生のとき、次のようなことばを教師から浴びせられて勉強していたのである。「この問題にはこの解答！それを単に覚える！」「なんでこういう答えになるかは考えなくていい。解答の仕方だけ暗記する！」「センターはキーワードだ。キーワードだけ覚えていけばいい。そんな風に図説を開いている時間はない。」「なぜ大学に入るのかは今考える必要はない。大学に入ってから考えれば良い」。そしてその結果どうなるかについて、ある女子学生は次のように書いた。「自分は日本史が大好きで、年号は全ておぼえていた。しかし大学入学後、すぐ下の妹が大学受験勉強のために年号を教えて欲しいと言ったとき、あれだけおぼえていた年号をすべて忘れてしまっていることに気づいた」。このことはつまり、そのような受験学力は大学で通用しないばかりか、大学入学後に保持することさえできず、受験がすめばほどなくして剥落してしまうことを示している。筆者はそれを「剥落する受験学力」と呼んでいる。

いっぽう、希ではあるが、それとは別に、「高校から大学へと連続的に発展していくような、主体的で創造的な学力」をそなえた学生にも触れてきた。筆者はこのような学力を「高大接続型学力」と呼び、その内容と構造、その形成過程と形成環境とを探る必要があると考えてきた。このシンポジウムでは、そのような学力を、中高一貫校がどのように保証できるのかを探ろうとした<sup>1</sup>。

#### 1.2 パネリストについて

本シンポジウムでは、「大学入学後も剥落しない学力」が育まれた例として、中高生の時からの問題発見・解決能力や特定のテーマへの知的関心を発展させて研究者になった人たちに着目しようとした。

パネリストには高大接続型学力形成をした人たちを選ぶ必要があった。そのためだけなら、と

---

<sup>1</sup>名古屋大学教育学部附属中・高等学校は、国立大学附属としては唯一の併設型中高一貫校である。

くに研究者である必要はなかった。しかし少なくとも研究者は、高校時代の学力をその後も継続的に発展させた人たちだと考えることができる。そこで今回は研究者にパネリストになって頂くことにした。

その際、「高大」接続を上下に広げた「中高大院接続」という観点から、中学から大学院までの15年以上のスパンで、研究者になった過程を登壇者が振り返り、それを互いに示し合うことで、これまで共有されていなかった知見を得ることを目指した。

パネリストは、当初、名古屋大学教育学部附属中・高等学校の卒業生を含めて、多様な中高一貫校の卒業生にお願いする予定であった。しかし専門領域、年齢、性別などをバランスよくお願いすることができず、なかなかパネリストが揃わなかった。そこで同校の卒業生4名にお願いすることにした。これによって、文系と理系、ベテランと若手などを考慮したパネリストの多様性を設定することができた。また、同校卒業生のパネリストに絞ったことから、コメンテータも同校卒業生の根本氏にお願いすることにした。そうすることで、なによりも、シンポジウムで陥りがちな議論の拡散を防ぎ、一定に集約された話題提供がなされることを期待した。その上さらに、4名のパネリストには、あらかじめ共通の質問をして、ご講演の中でそれに答えて頂くことで、パネリスト間の発言内容の異同が明確になるように工夫した。

なお、シンポジウムは当初からオンラインで実施する計画だったが、パネリストは全員、当高大接続研究センターのオフィスのある名大附にいらっしゃり、そこから登壇することを希望なさっていた。しかし新型コロナウイルス感染症による緊急事態宣言が発出されたため、パネリストは全員、ご自身のご自宅あるいは職場から登壇することになった。

## 2. パネリストの講演とコメンテータとのやりとりから。

このシンポジウムでのパネリストの講演とコメンテータとのやりとりは、(コーディネータの手前味噌との誹りを恐れず敢えて記せば、)じつに多様で奥深いものだと感じている。したがって本稿で筆者は、それを拙速に分析して、なんらかの結論を導こうとは考えていない。このシンポジウムの内容は、今後多様な観点から検討すべきことを含んでいるはずだからである。たとえばカリキュラム研究者は、ここで語られて学力形成の背景となる同校のカリキュラムの編成と運用はどのようなものなのかに関心を持つかもしれない。また教育社会学者なら、このシンポジウムの内容のうち、「社会空間」としてのこの学校の特性と高大接続型学力形成との関連に着目するのではないかと考える。また高校教師は、自分の学校の教育とこの学校の教師の教育とを対比して考えるかもしれない。

そこで以下では、シンポジウムの発話での言及をとりあげ、それをいくつかのトピックに大まかに分類して、それについて考えてみることに留めたい。ただしその際、筆者自身が同校の附属する教育学部の教員として経験したことや、同校の校長を併任したとき(2010年度～2012年度)に経験したことと関連づけてコメントをすることをお許し頂きたい。なお、「生徒も教師も～だった」というような言及は、生徒と教師の両方に入れてある。また発話通りではなく、多少概念化したものもある。

## 2.1 生徒について：個性

まず生徒についての言及を記す。通常は教師についての発話の次に生徒についての発話を記述するのだと思う。しかしパネリストやコメンテータは、事前の準備の時から、まず他の生徒のことを話した。このことについて、生徒からみれば当然、生徒がよく見えるものだとすることもできようが、ひょっとすると、この学校の特色は、まず生徒ひとりひとりにあると考えることができるのかもしれない。まず、生徒の「個性」について取り上げる。準備のときから、異口同音に最初に聞かれたのが、生徒の「個性」の豊かさであった。

- ・何かに熱中している
- ・着眼点が面白い
- ・話が面白い
- ・個性と個性のぶつかりあいがある
- ・中学から自分の考えや意見を持っていてしっかり主張できる
- ・大学のレポートが書ける
- ・男女問わずみんな仲良く和気藹々としている
- ・スクールカーストがない
- ・成績以外の指標で他者を評価する意識を共有している

このような生徒の特性については、この学校が形成したものというより、そういう特性を有する生徒たちがこの学校に入学してきているのだと考えるべきかもしれない。

パネリストの多くは、保護者がこの学校を選び、それに従って入学したのだが、その際、保護者は、この学校が自分の子に合っていると判断したのであろう。またそもそも進学実績の高くないこの学校に自分の子を入学させようと考えていることから、生徒の保護者は受験学力形成に焦点化した中等教育を望んでおらず、のびのびとした学校生活を望んでいるのだと考えることができる。

そのような家庭的背景と特質を有する子たちが、この学校で、相互に認め合い、尊重し合う様子がこれらの言及から分かる。もちろん、このような特性を入学時にすでに生徒が持っていたとしても、それが保持され発展させられているのは、やはり同校に、それを守り育てる特質（学級風土、学級文化、学年文化、学校文化など）があるからだと考えるのが妥当であろう。

## 2.2 生徒について：自己評価と主体性

生徒に関する上記の特性と強く関連するが、これも準備の時からよく聞かれた生徒の特性として生徒の「主体性」がある。とくに今回のシンポジウムでは、自分たちが自分たちをどう評価しているかについての言及が多い。

- ・自分なりのものさしを持っている
- ・自分を評価するものさしを持っている
- ・自身のことをどう評価するかを自分で設定している



- ・他人と比較をしない
- ・得意分野を伸ばす
- ・生徒それぞれの個性を尊重し認め合う
- ・学力・体力で評価せず個性で評価する
- ・成績以外の指標で他者を評価する意識が生徒にも先生にも共有されている

これらについて、以下ではさらにいくつかの観点から考えてみたい。

### 2.2.1 自己に対する相対評価と絶対評価

これらの言及から、同校では、個性を有する子が平均的・画一的な生徒集団の中で突出してしまつて居心地が悪くなるようなことがないことが分かる。おたがいに個性を有していて認め合っているし、そもそも他人と比較しない。そして比較しないということは優劣の判断をしないということでもある。

筆者は個人的には「自尊感情」と「自己肯定感」を使い分けている。それは「自尊感情」を、成績、スポーツの能力、顔や体のづくり、家庭の経済的豊かさなどのなんらかの一定のものさし（尺度）による他者との相対評価であるとするのに対して、「自己肯定感」は多様な尺度を総合した自己に対する絶対評価であるとするものである。相対評価である自尊感情は、いくら高くしようとしても、同じ尺度で自分より高い者が出現することで自分は転落してしまう。その点、絶対評価である自己肯定感は、誰かの出現によって下がってしまうことがない。たとえば、前者はシーソーの端の端にのっていて、反対の端に乗る相手によって、自分が上がったりがったりするのに対して、後者はシーソーの真ん中にのるため、他者によって上下することがないと言えるかもしれない。その意味では、お互いに認め合い尊重しあう同校の生徒たちは、他者との比較による自尊感情の上下に苛まれることなく、自己肯定感を持って学んでいると言えるかもしれない。

### 2.2.2 他者の尊重≠相互無関心と相互不干渉

ところで筆者は校長在任中にこういう話を聞いた。同校には、髪を染めてはいけないという校則は現在でもない。それで、いちど金髪に染めてきた男子生徒がいた。このような場合、他校では、校則を盾に「黒に染め直してこなければ教室に入れない」と生徒に言って教室に入れないことがあり、それが問題視されることもあるが、同校にはそのような校則もなく、その生徒も教室に入れる。しかし教師も彼に、まったく何も言わないわけではなく、それはふさわしくないと指導はする。すると後で、同級生の男子生徒が教師のところにやってきてこう言ったという。「先生、アイツのこと、長い目で見てやって下さい。アイツ今、遅れてきた反抗期なんですから」。これは、「あの生徒は今、少し葛藤を抱えていて、それが髪を金色に染めるという行為に表れているのだから、教師も彼を、規範的・教条主義的に扱わず、時間をかけて見守ってやってほしい。自分たちも彼を見守るから。そうすれば彼は自分で問題を解決できるはずだから。」ということなのだろう。そして実際その結果、その男子生徒は、ほどなくして髪を黒に戻してきたとのことであった。

生徒の中で突出している生徒を、生徒が阻害する傾向が、現在の多くの学校には残念ながらある。それに対して同校には、突出した生徒も認める風土があると言えそうだ。ただし、「多様性

を認める」ということは、それぞれが勝手なことをして良いということになり、無関心や相互不干渉につながっていく危険性を有している。しかしながらこの例では、無関心や不干渉には陥らず、教師に働きかけてさえいる。

同様のトピックは他にもある。ある健康上の問題を有する生徒がいて、それが学校生活にも影響していることを、その生徒が授業で自分で発表した。それを聞いた同級生の生徒が医師である父親にそれを話し、その父親が同じ病院の専門の医師を紹介してくれた。これも、同校の生徒の、他の生徒に無関心や不干渉にならず、他の生徒の問題に関わっていく姿勢を表している。

### 2.2.3 高大接続型学力の背景としての生徒の中のcaringとconcern for othersの姿勢

アメリカの大学入学者選抜には、新しい動向として、Tuning the Tideというのがある。これはハーバード大学教育学研究科を中心とするMaking Caring Common Projectが2016年に発表したTurning the Tide: Inspiring Concern for Others and the Common Good Through College Admissionsという動きである (Making Caring Common Project 2016)。

同校の生徒は、多様性を認め合いながらも、決して相互に無関心・不干渉になるのではなく、caringの姿勢を持ち、concern for othersを有していると言えるのではないか。そしてそれが、同校の生徒が相互に「育てる力」となっていると言えるかもしれない。このような目に見えないもの、カリキュラムや校則などに表れないものが、「高校から大学へと連続的に発展していくような、主体的で創造的な学力」を育むための必要条件になっているのかもしれない。

### 2.3 教師や教師と生徒との関係性について

教師に関する言及と教師と生徒との関係性に関する言及も多かった。それらは次の通りである。

- ・ 個性的な教師たち
- ・ いろいろなユニークな先生方
- ・ 考えることの大切さを教える教師
- ・ 自分の好きなことを本当に楽しそうに話す教師
- ・ 生徒がわかろうがわかるまいがお構いなく相対性理論を何時間もやる教師
- ・ 知の価値を教える教師
- ・ 知への憧れを与える教師
- ・ 管理する教育ではなく自由な想像力を育む教育
- ・ 成績以外の指標で他者を評価する意識を共有する教師
- ・ 学校で教えるということを超えてたとえば史料の読み方などを教わった
- ・ 非常に身近な所に研究者がいた
- ・ 教師と生徒の距離がとても近い

これらについても以下に、さらにいくつかの観点から考えたい。

### 2.3.1 自己提示ではなく自己開示としての教師の研究課題の披露

これらの言及から、生徒たちだけでなく、同校の教師もまた、個性的で多様であることがわかる。とくに、教師自身が探究する課題を持っていて、それを生徒が理解できようと思きまいと、隠さず生徒に示している点に特徴があるように思われる。それは生徒の能力を高く見て、要求水準を高くし何かを学ばせるための教育戦略上の教師の自己呈示 (self-presentation) というより、自分の世界を隠さず示す、自由で自発的で、ある意味で素朴な自己開示 (self-disclosure) であるように感じられる。

しかしながら、そのような教師は生徒にとって近づきたい存在ではなく、「教師と生徒の距離がとても近い」という言及にも見られるように、両者は非常に近い存在であったようである。ただし、今回のパネリストは全員研究者であるため、そのような教師からとくに学んだり吸収したりした点が多かったと考えるべきかもしれない。これが、研究者にならなかった生徒たちにも同様であったかどうか、今後確認していく必要がある。

### 2.3.2 教師が特定の生徒を突出視しないことが生徒にもたらすもの

なお、上述の、一般に見られるような、突出した生徒を阻害し、はじめにつながる他の生徒の行動は、じっさいには、ある生徒が突出していることを教師が問題視していて、他の生徒たちは、その生徒に対する教師のそのような見方を汲み取り、そのような意図を読み取って、(あるいはたとえ無意図的であろうと、教師がそのような意図を生徒たちに読み取らせて)、それに便乗して阻害するケースも多いのではないか。その意味では、生徒が生徒を阻害しないためには、教師が生徒を突出視しないことが何よりも必要である。

### 2.3.3 前に踏みだそうとする生徒の足を生徒も教師も引っ張らないこと

これに関連してあるアネクドットを紹介させて頂きたい。同校の総合人間科の授業で、生徒全員が、自分の研究したいテーマに関わる専門家にインタビューに行く課題がある。誰にどんな話を聴くべきかを考えて、その人に直接に電話などをお願いをし、アポイントメントを取って会いに行く。それは当然、校外の専門家になる。そのリストは職員会議に提出されるため、教師が知らないうちに生徒が誰かに連絡を取ることは無い。

筆者が校長在任中に中学1年の2人が(2人1組と決まっているわけではない)、ノーベル賞受賞者の益川敏英名古屋大学特別教授に話を聴きに行きたいということになり、直接に連絡し、アポイントメントを取ることになった。このような場合、通常なら、まず同級生らが、「えー、そんなに偉い先生のところに行くのー」などと否定的なこと言ってその行動にブレーキをかけるのではないかとと思われる。そして教師も、教師として大人として、「そんなに偉くて多忙な先生のところ中学1年生が話を聴きに行きたいなど失礼だ」などと言って、止めるのではないかとと思われる。しかし実に見事なことに、同級生たちも教師たちも、誰一人としてこの2人を止めなかった。そして大変ありがたいことに、益川先生はこれを受けて生徒に会って下さった。このように、生徒は、前に踏みだそうとする他の生徒の足を引っ張らない。そしてその基盤には、そもそも教師が生徒の足を引っ張らないというこの学校の教師のあり方がある。

ところで、ノーベル賞受賞者にインタビューに行こうとする生徒を誰も止めなかったというこ

とには、さらに深い意味があると筆者は考える。それは、このことが、同校の生徒も教師も、インタビューを受けて下さるすべての人を等しく尊重しているということを示すからである。なぜなら、「ノーベル賞受賞者の先生はそもそも偉い人で雲の上の存在であり、おまけに超多忙なのだから、インタビューなどお願いすべきでない。他の人にしなさい。」と生徒に言うということは、「反対解釈」をすれば、「他の人はそれほど偉くも忙しくもなく、気軽をお願いして良い人だ」と言っているのと同じであって、これでは教師が、生徒の調査に協力して下さる方々を、その属性によって「差別」していることになるからである。その点で、「ノーベル賞受賞者だから行くなと止める」という常識的な行動をしなかったことは、常識の裏に隠れているこのような差別や偏見から自由であったことを示していると考えべきである。そしてさらに、他者に対するこのような等しい尊重の姿勢は、生徒も教師も、自分が尊重されているからこそ、持てるものであるのかもしれないと考える。

#### 2.3.4 教師どうしも足をひっぱりあわないこと

このような同校の教師の様子を考えるにつけ、学校や教師が生徒に画一的な受験学力形成を行う体制にないということは、その教師自身を自由にするのだと理解できそうである。

これは筆者が校長を務める前のことだが、同校のSSH (Super Science High School) の公開発表会での授業の中に、英語の若い女性教師が、2時間連続授業で、ドイツ語のクリスマスキャロルを生徒に教えて歌わせるものがあった。この授業では、この教師が自分でピアノを弾き、美しい声で範唱した。同校では、社会科学も人文科学もscienceと考えているので、このような授業も認められたのだと考えられる。しかし当然、発表の後の分科会で、参加していた他校の教師から「これでもSSHなのか?」と批判的な質問が出た。他校の教師にとっては、これはscienceではないではないかという疑義に加え、英語の教師がピアノを弾いて自ら歌を唱って歌を教えることや、しかもそれがあろうことかドイツ語の歌であることなどに、複合的な違和感を持ったのに違いない。しかしながら、当然、そのような批判がなされ得ることは同校教員の誰にも推測できただろう。だからといって、それを止めない。言い換えれば、同校の教師はお互いに自主性と自由、そして授業における創意を最大に尊重する。このように同校では、上記のように生徒が生徒の足を引っ張らず、教師も生徒の足を引っ張らないだけでなく、教師同士もお互いに足をひっぱらないのである。

### 3. 思考力を含む全人的な発達の背景としての自由

これらのほかにも、「高校受験が無いこと」「大学内にあるという環境」など中高一貫校や大学附属学校に関する多様な言及がなされたが、ここでは紙幅の関係ですべてを取り上げることはできない。ただしシンポジウムの最後のコーディネータのお礼で取り上げた「自由」について、ここで再度取り上げたいと思う。

#### 3.1 「自由を学ぶ」のか「自由に学ぶ」のか

筆者がコーディネータの最後のお礼のことばで述べたように、パネリストが共通して、しかもしばしば言及したのは、「自由」についてであった。それらには、上にも上げたように、「管理す

る教育ではなく自由な想像力を育む教育」のように、「自由」ということばを使って言及されるものもあるが、「好きなことを伸ばしていける」「好き勝手に勉強できた」などの異なる表現を使った「自由」に対する言及もある。しかもそれ以外にも、生徒や教師への上の多くの言及が、「自由」を内包して含意しているとも考えることもできる。

これはコーディネータの最初の挨拶で筆者が述べたことだが、同校には、遠足や修学旅行のときのお小遣いはいくらまでという決まりがない。過去に、保護者から決めて欲しいといわれたこともあるようだが、断固として決めない。しこれを決めたら、いくら持っていくのが良いのかを、生徒が「①自分で考える機会」「②友達と考える機会」「③保護者と考える機会」を学校が奪うことになる。このようにして、「思考力を育む」といいながら考える機会を奪っている学校は多い。それにたいして、同校はこのように、それを奪わず、生徒に自分で、あるいは自分たちで考えさせる。つまり「自由」とは、「主体的に考えるための必要条件」である。

そして同校の特徴は、上記の遠足のときのお小遣いのように、この自由が授業以外のさまざまな場で保証されることである。しかも益川教授に会いに行こうと考える中1の生徒を誰も止めないように、これは学習の場面でも保証される。つまり、パネリストたちがしばしば言及した同校の自由とは、「学習において教えられる」のではなく、「生活と学習において保証されることを通して与えられる」ものだと言えそうである。

これもコーディネータの最後の挨拶でも触れたが、筆者が校長のとき、本校の卒業生で学校医をつとめて下さった高齢の歯科医師の先生が、「クラス会があったとき、自分たちは『自由について学んだ』のか『自由に学んだ』のかどちらか？」という議論になった。結論は『自由に学んだ』だった。」とおっしゃった。学校は自由について教える場であるにも関わらず、多くの場合、児童・生徒を自由にはさせてくれないパラドクシカルな場である。しかしそのパラドックスは、教育実践において解消される方途が無いわけではないことを、同校のあり方は示している。そして同時に、一般の学校では、生徒に与えられるべき自由を何が奪っているのかも、示唆しているように思われる。

### 3.2 自由を与えられてひとつのことに集中することは幅広い基礎学力の形成を阻害するか

ところで、各パネリストが、上記のように自由を強調したことについて、コメンテータの根本氏から、「やりたいことだけやっていたことで、基礎学力は付いたのか？」という主旨の質問がなされた。とくに中学のときから城郭のこと以外は何も勉強しなかったという千田氏に対して、この質問がなされた。これに対して、大学卒業後に大学院に進学せずに名古屋市博物館の学芸員になった千田氏が、「もちろん名古屋市なんかのときも、公務員の教養試験みたいなのが一次(試験)でありますから、それはやっぱり、なぜか知らないけれども点が取れたんですよ。不思議です。附属中高の教育が良かったからかもしれません。」と答えたのは、上のシンポジウムの内容の記録の通りである。ここで千田氏は「不思議です」と答えているが、これは筆者には不思議ではない。このことに関連して、教育における自由と主体性について考える際に常に筆者の頭から離れないある学校の生徒の物語をここに紹介することをお許し頂きたい。

アメリカのマサチューセッツ州フラミンガム市に、サドベリーバレー・スクールというフリースクールがある(バレー学校ではなく、サドベリーバレー Sudbury Valleyは地名である)。1968年

に創立された学校で、この学校の徹底した自由教育は、今日のフリースクールのひとつの有力なモデルとなっており、現在では世界中に、そのモデルを生かした学校が存在し、日本にも数校ある<sup>2</sup>。この学校には、学年も学級もなく、カリキュラムも時間割もない。したがって、何年生までに何が読めなければならないとか何が書けなければならないとかの決まりも無い。そのため、読むことに関心がなければ、学年がかなり上がっても字が読めず、非識字の状態の子どもが存在し得るし、実際に存在する<sup>3</sup>このような環境で、すべての子どもたちは、この学校で何をしたいかを自分で決め、それに集中する。筆者はこの学校に2度、それぞれ1週間ずつ滞在し、観察とインタビューを行った（大谷2000、2004）。

この学校について紹介したNHKの番組があるので、筆者は大学の授業でそれを学生に見せる。そうして受講者の質問を受けると、決まって出るのが、「好きなことだけやっていて大丈夫なのか？他のことをまったく勉強せず、好きなこと以外はまったく知らない大人になってしまうのではないか？」というものである。これに対して筆者は、「みなさんがそのような疑問を持つのは当然です。しかしそのような疑問を持つのは、みなさんが、本当に徹底して好きなことだけやって良い環境に置かれたことが無いからです。」と答えて、発問を交えながら次のことを考えさせる。

この学校に、釣りが大好きで、釣りだけをしている子がいた。学校の敷地内に川を堰き止めて水車を設置したことによる大きな池があるので、そこで1日中釣りをすることもできる。この子は実際にそうしていた。ところで1日中釣りをしていると、何がしたくなると思うか？そう、もっと釣れるようになりたいと思うのではないか。そうなったらこの子はどうするか？そう、釣りに関してさまざまなことを知りたいと思うようになるのではないか。ではそのためには何ができなくてはならないか？そのためには本が読めなくてはならない。そこで字を読めるようになりたいと思うのではないか。また、そうやって本を読むことで、もっと釣れるようになるために、魚や水棲昆虫の習性、天候、自然、季節の変化、釣り道具、釣り道具の材料、釣り人と人々の暮らしの歴史など、釣りを中心に知識を構造的に広げる必要があるのではないか。このように、徹底して好きなことをやれば、じっさいには、多くを学ぶことになる。知識は多くのことの間連の中にあるので、その知識だけを高めることはできない。それはちょうど、砂を細い棒のように立てることはできず、砂を高くしようとすれば、必ず砂山のように裾野まで広がることになるのと同じだ。この子は実際、そのようにした。

城だけについて学ぶと言っても、それを徹底的にすれば、歴史、政治、経済、交通・運輸、人文地理、宗教、文化など、人文・社会科学系の多くのことばかりか、地形・地質、自然地理、建築、土木などの自然科学系や工学系の多くのことに触れることになる。しかもそのようにして得た知識は相互に密接に関連づけられていて、教科のような「仮構<sup>4</sup>」に分断されたものではない。自由に学ぶことは、決してその学習者をその世界に閉じ込めるのではなく、そのトピックを中心に幅広い世界を構造的に認識させるものだとは言えないだろうか。

<sup>2</sup> それらは「～ Sudbury School」や「～ Valley School」と名付けられていることが多い。

<sup>3</sup> ただし卒業要件として、自分で卒業研究をして発表し、全員の投票で認められなければならないので、卒業までには字が読め、書けなくてはならない。

<sup>4</sup> 上田（1992）の「動的相対主義」に依拠すれば、教科もまた「仮構」と考えることができる。

### 3.3 「基礎学力」の内容と獲得過程を問い直す必要

このように考えると、そもそも基礎学力とは何のことを指しているのかさえ、問い直す必要があることに気づく。一般には、各教科の学習の基礎となるもので、それを獲得することで、そこから先の学習、たとえば応用学習が成立するものだと捉えられていると思う。

しかしこれらの例をみると、基礎学力は、一般には応用学習と見なされるようなものに挑戦しようとしたとき、それに導かれて獲得されるものでもないかと思われる。そしてその時には、その基礎学力の獲得のための学習に対する動機付けは、きっと非常に高いものになる。

異分母分数の足し算をするためには、たしかに約分や通分ができなければならない。そして場合によっては、帯分数を仮分数に直すこととその逆とができなければならない。だから約分や通分から先に学ばなければならないというのが教育の常識である。しかし約分だけを学びたい子や通分だけを学びたい子はいないだろう。だとすれば、したくないことでもカリキュラムのシーケンスに従ってできるような特性を有した子が、教室の成功者になる。基礎から応用にきちんと進むカリキュラムは、このように、子どもを特性で振り分けるフィルタとしても機能する。

それにたいして、どうしてもいきなり異分母分数の足し算がしたい子がいたとする。それで最初は無手勝流にそれに挑戦するかもしれない。しかしその挑戦の過程で、そのためには約分や通分を学ぶ必要があることを痛感する。そしてそのときこそその子は、異分母分数の足し算ができる「なりたい自分」の姿を描いて、約分や通分や喜んで勉強するだろう。それだけでなく、約分や通分の機能と意味とを深く知るだろう。そうだとしたら、誰にでも、とにかくまず約分と通分を学ばせるといことは、随分とつまらないことのように思える。

主体的な学習において、学習の過程はその子の関心や目的に応じて、個性的に整えられるべきものであって、決して、学習指導要領や学校のカリキュラムに沿って、一律に決められるべきものではない。それを許容するかどうか、主体性の育成にとって重要なのだと考えられないだろうか。

## 4. 同調圧力の無いことと心理的安全性

ところで、有名なアッシュの実験(Asch, 1951)とその結果について知っていれば、同調圧力が集団の中でいかに簡単に生じ、またそれを個人が克服するのがどんなに難しいかについて、理解しているだろう。そして、同調圧力に関連して現在話題になっているのが「心理的安全性 psychological safety」である。この概念はGoogle社が組織のあり方を研究した結果、プロジェクトチームの成功に最も大きな影響を与える要因として発表したことからよく知られるようになった(Bargmann & Schaeppi 2016)。これは日本でも、高石(2020)や山内(2021)のように、企業内組織などに適用されることが多いが、一色・藤(2020)のように、学校教育にも適用されることがある。

日本の授業を観察したアメリカの社会学者が、「日本の授業では、教師に指名された子は、それだけでは発言することが許されず、教師の指名に応じて自分が発言することに対する周囲の許可を得てからでなければ、立って発言することができない」と書いているのを読んだことがある。それは、指名された子が、発言の前に、周囲を見回して、「え？おれ？おれ？」などと言い、周囲の子に「そうだよおまえだよ」などと言われたり、そういう表情を向けられたりして初めて、

発言することを指している。このことを大学の授業で学生に言うと、ほとんどの学生は、そういうことは日常的にあり、周囲の生徒も自分もよくやっていたと述懐する。なかには、意図してそうしていたという学生もいる。つまり多くの教室では、学びのあらゆる場面で、児童・生徒は周囲の視線を気にして、周囲の承認なく、教師の指示に応じることができない。

たとえはじめが横行していない教室でも、このような状態であれば、心理的安全性があるとは言えない。つまり、現在の学校をこれらの概念で説明すれば、そこはまさに、この同調圧力が非常に強く、心理的安全性が非常に低い場であると言うことができる。それに対して同校は、同調圧力が低く、心理的安全性が高いと言うことができるのではないか。そうだとすれば、高大接続型学力の育成のための主体的な学習を成立させることができるかどうかは、カリキュラムや指導法や評価法の工夫以前に、学校をこのような場にできるかどうかにかかっているのだと言えないだろうか。

現在進行中の高大接続改革では、大学側に、大学入学者選抜での主体性の評価を求めている。それに呼応して高校側も、生徒の主体性を高めるような教育をしようとしている。しかしその際、ここに述べたような、同調圧力や心理的安全性に関する条件が備えられないなら、主体性を育むことは困難だと考えられる。そして同調圧力の高さや心理的安全性の低さは、小学校からすでに問題状況にある。だとすれば、主体性を重視する高大接続改革には、小学校からの教育改革が必要だということになる。

## 5. おわりに

以上、今回のシンポジウムの内容に関して、コーディネータの考えるところを述べた。くりかえしになるが、それは決して、このシンポジウムのまとめではなく、内容の豊かなこのシンポジウムに触れて、コーディネータである筆者が、「今」、考えたことである。

ところで同校の生徒については、筆者はとくに、他の学校の生徒に会いだしたいようなコミュニケーション能力や社会性を感じることがある。しかも筆者は、生徒たちのそのような能力の、舌を巻くような臨機応変な柔軟さに、幾度となく驚かされてきた。

筆者は現在それを、多様な専門的概念概念との関連で検討できる可能性があるのではないかと考えている。そのひとつは、今日よく言われる「非認知(的)能力 (non-cognitive skills)」(Gutman & Schoon 2013、遠藤 2017、西田ら2018、一般財団法人日本生涯学習総合研究所 2018) である。しかし今回のシンポジウムでは、それに直接に言及するものはなかった。したがって、それらの考察は、別稿においておこないたいと考えている。

いずれにせよ、このシンポジウムに触れた各位が、このシンポジウムを、高大接続型学力の形成についての検討のための材料として下さるなら、コーディネータとして、これに勝る喜びはない。そしてその際、その検討が、同校の生徒たちに負けられないような主体的で個性的なあり方でなされることを期待して、本稿を閉じることにしたい。



## 文献

- 一色 翼・藤 桂 (2020) 小学校教師における創造的な教育実践に関する探索 的検討: 保護者に対する教師の心理的安全性との 関係に着目して. 筑波大学心理学研究. 58. 21-32
- 一般財団法人日本生涯学習総合研究所 (2018) 「非認知能力」の概念に関する考察. <http://www.shogai-soken.or.jp/htmltop/toppage.files/non-cog2018.pdf>
- 上田 薫 (1992) 人間形成の論理 (上田薫著作集) .黎明書房
- 遠藤利彦 (2017) 非認知的 (社会情緒的) 能力の発達と科学的検討手法についての研究に関する報告書. 国立教育政策研究所
- 大谷 尚 (2000) あるフリースクールの学校文化の検討 —サドベリーバレー・スクールでの観察と面接にもとづく分析—. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学). 42 ( 2). 11-27
- 大谷 尚 (2004) 教育システム(組織)の新しいパラダイム —フリースクールやホームスクールから日本の学校を考える—. (西之園晴夫・宮寺晃夫 編著『教育の方法と技術』第2章) ミネルヴァ書房. 31-55
- 高石光一 (2020) 従業員の学習目標志向性が革新的行動に及ぼす影響過程:調整変数としての心理的安全性及び媒介変数としての受益者接触との関連メカニズムについて. 商学集志. 90 ( 1) .333-352
- 西田季里・久保田(河本)愛子・利根川明子・遠藤利彦 (2018) 非認知能力に関する研究の動向と課題—幼児の非認知能力の育ちを支えるプログラム開発研究のための整理—. 東京大学大学院教育研究科紀要. 58. 31-39
- 山内桂子 (2021) 現場のチームワークを高める心理的安全性. 安全工学. 60(1).9-14
- Asch, S. E. (1951). Effects of group pressure upon the modification and distortion of judgment. In H. Guetzkow (ed.) Groups, leadership and men. Pittsburgh, PA: Carnegie Press.
- Bargmann, B., & Schaeppi, J. (2016). A data-driven approach to group creativity. Harvard Business Review. <https://hbr.org/2016/07/a-data-driven-approach-to-group-creativity>
- Charles Duhigg (2016) What Google Learned From Its Quest to Build the Perfect Team. New York Times. 2016. 2.25  
<https://www.nytimes.com/2016/02/28/magazine/what-google-learned-from-its-quest-to-build-the-perfect-team.html?smid=pl-share>
- Gutman, L. M., & Schoon, I. (2013). The impact of non-cognitive skills on outcomes for young people. Education Endowment Foundation.
- Making Caring Common Project (2016) Turning the Tide: Inspiring Concern for Others and the Common Good Through College Admissions. Harvard Graduate School of Education.  
<https://static1.squarespace.com/static/5b7c56e255b02c683659fe43/t/5bae62a6b208>